鑓花猫目覆（やりのはなねこのめくらづくし）

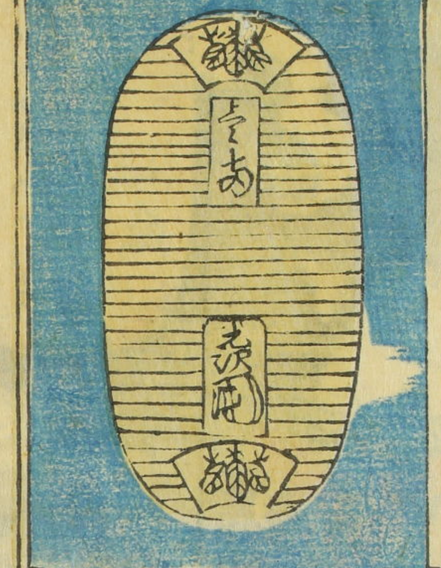
初編

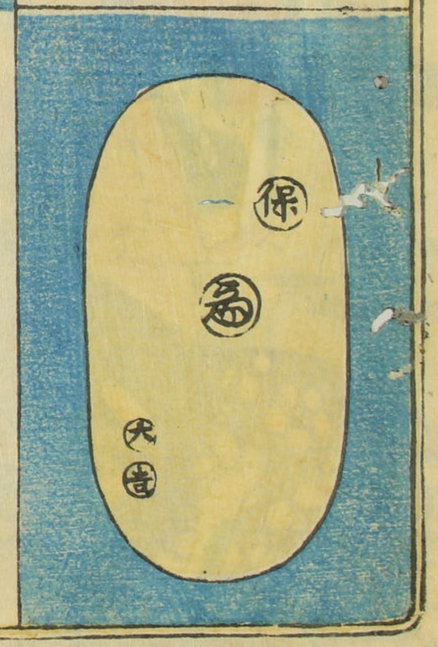
上

へ13
3783
1

門へ13
號3783
巻1

黄金の花猫乃
因加波〻初編
上





假名垣魯文作
一孟齋芳虎畫
藤岡屋壽梓

一

設端

作者魯文が竹馬の友なる講談師伊東燕國い猫の名を妙と得られが世の人猫燕國を林へ何処の席へ行るもそのうへ木の猫好きに故人國芳の家に居る宮の猫を飼ひ常にそれを愛翫とり魯文鼠をあそぶこと蛇ようを甚しきを友人燕國の許なる猫を乞て家に飼ひいつゝ抱の所とするに今年梓主松林堂より次へ

今昔百猫傳

伊東國猫

ふゑん國

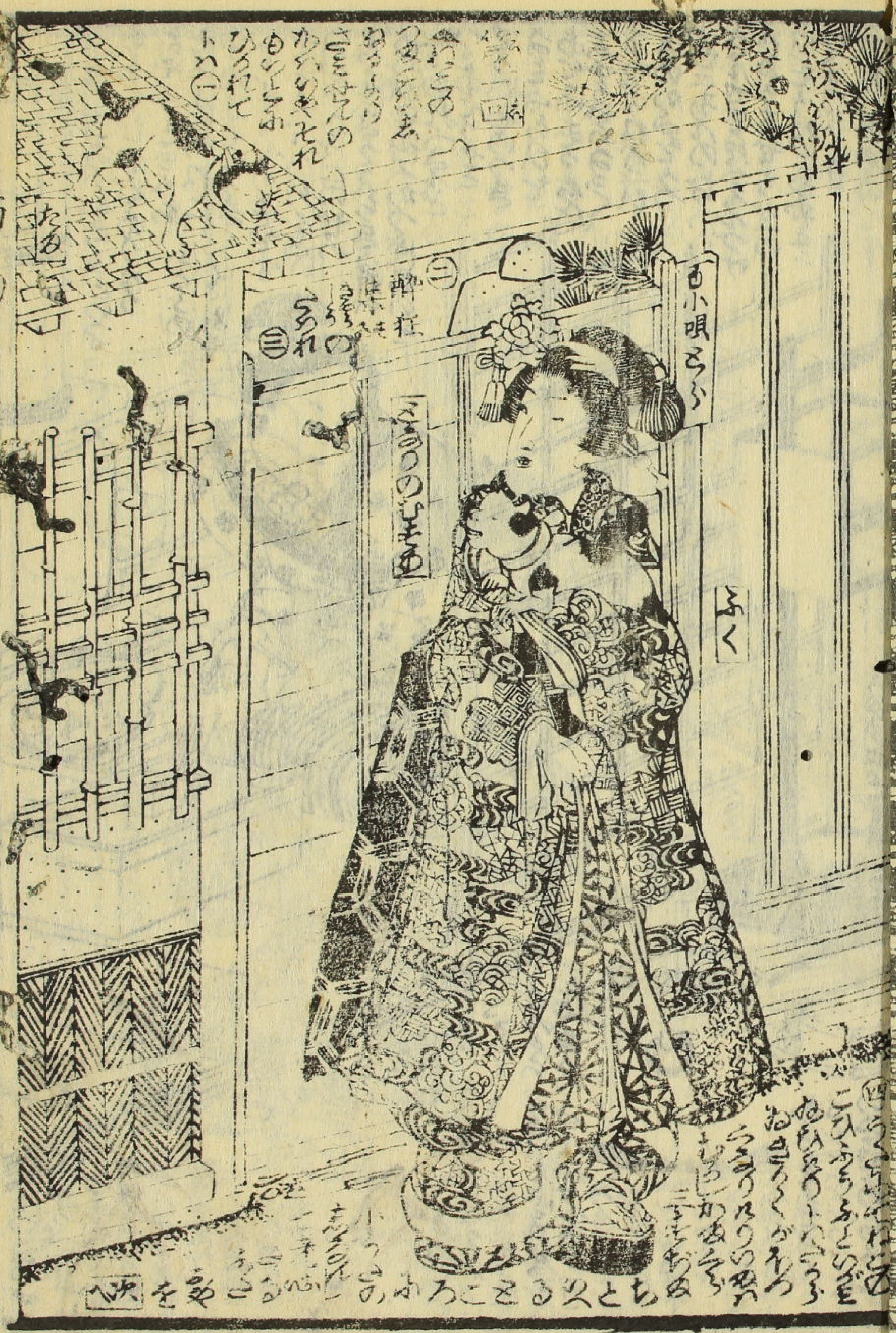
京山

羽ぶ猫の草紙を當世風ふ翻案して大急ぎの註文ものれが猫脚の札ふかり猫斉中ちて考ちて市

困る三本目の扇の猫骨折ひふく夜辺の油と根気の減ちを労して功ちふ以智恵を絞れど変ふ案更が付ぬ所註今夜のエふい

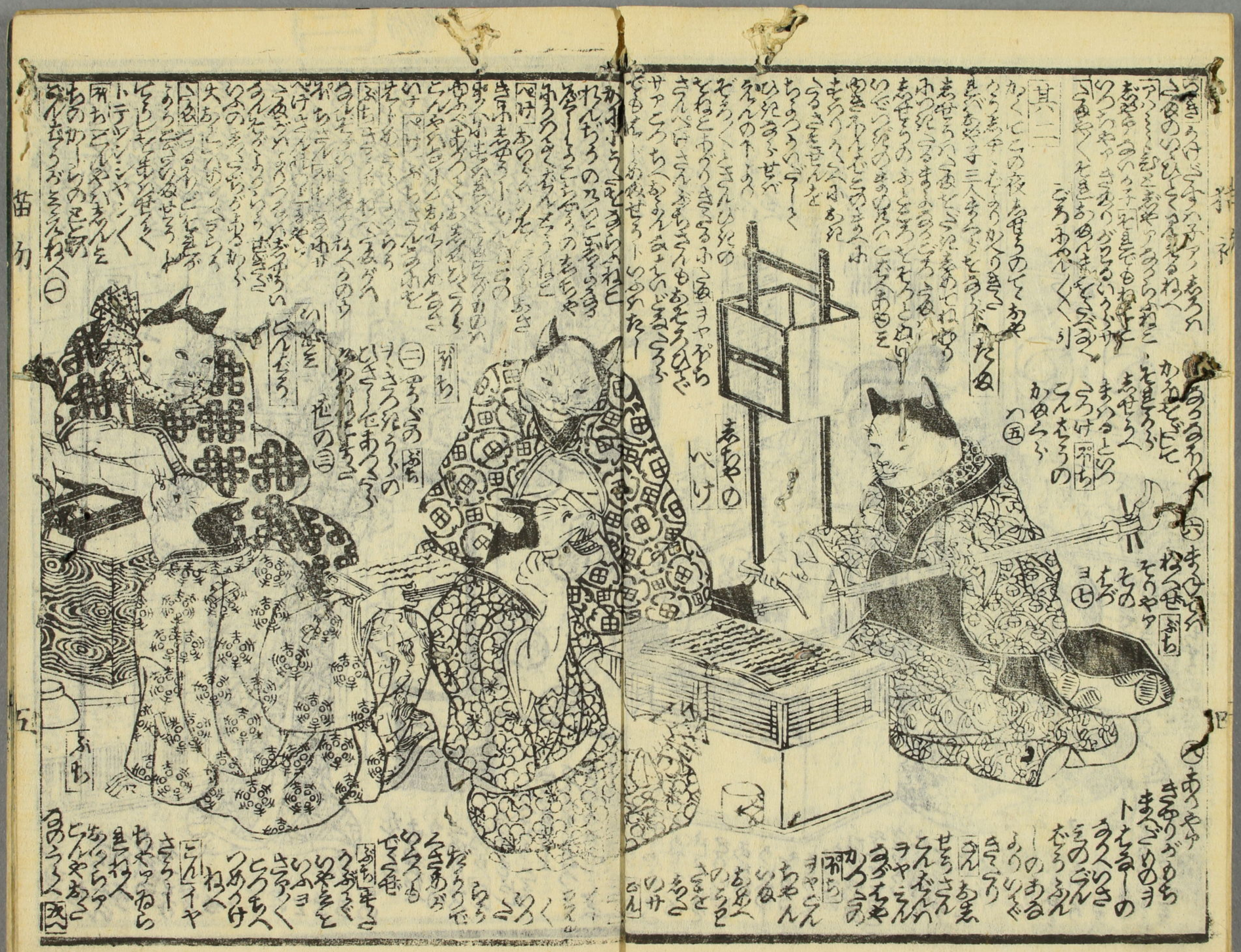
ぜうぬ尖アがちて札を押ち夜着引ろぬ打ふる真夜中頃とぶ時分勝手の方ふくかやくと物音ちるぶ耳に入不図目が覚て

ふゆう扨い盗人ぶ入うたと入熊坂袴ぶれ五右衛



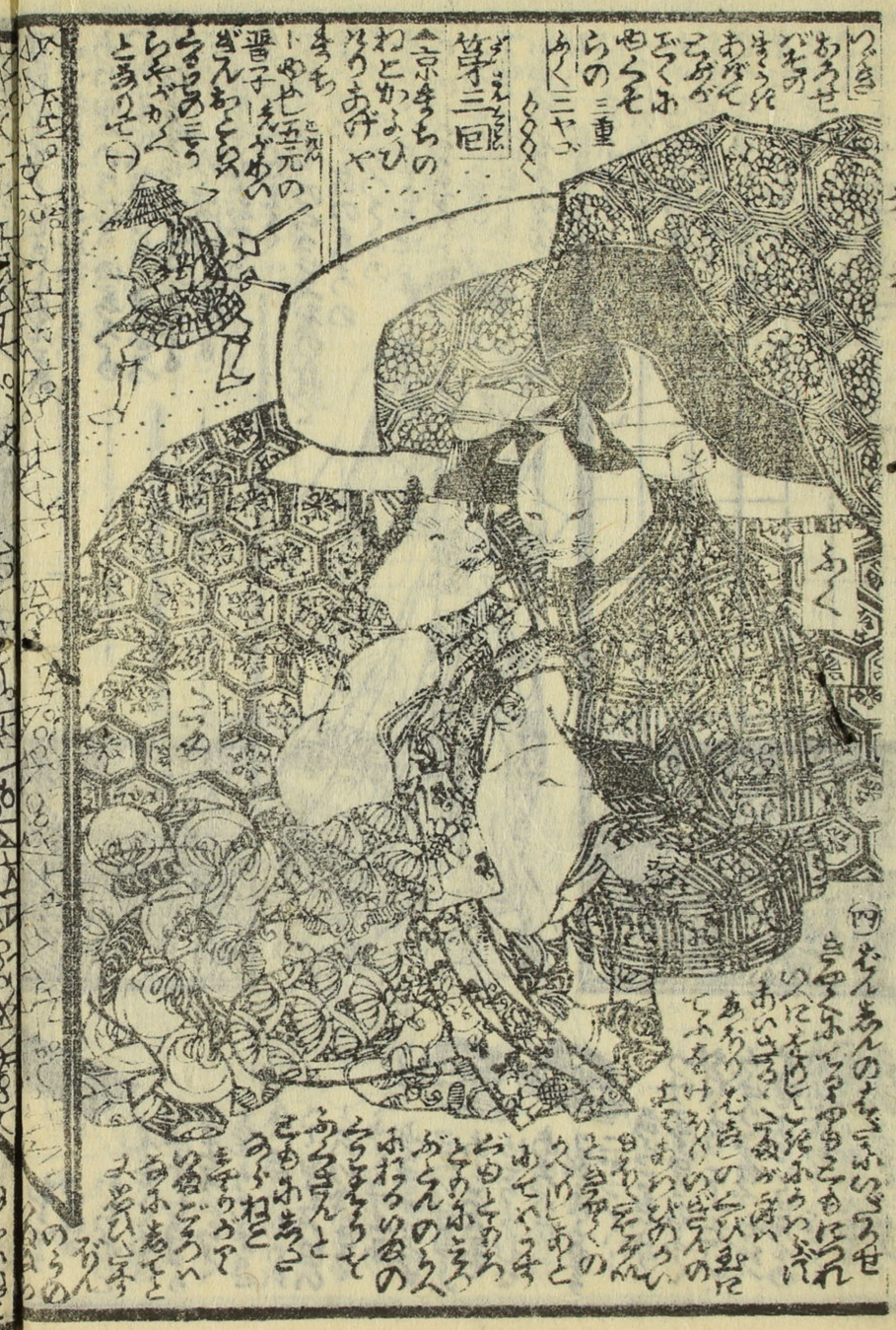
于時文久三亥春　假名垣魯文戯作

ごのごろごろかまど鍋釜の外盗まるゝ金銭なければ安心ながら落付て寝てゐられぜ折々く寝床を這起て枕元に建おきたる二枚折の屏風の蔭より按ろやく覗けバこハいかに燕國より貫ひうけたる畜の老猫近隣乃猫をあつめ打揃どくその身ハ米櫃の上に高坐をしめ後ろハ柱に百猫傳伊東にあらぬ國史爪でひつかき鰹節箱を机とし削りの鰹節にてトン〳〵と拍子をとり猫ごゑにて声に説出す耳慣しき猫ばなしを作者ハ息をころして窺ひ聴くまゝに腹に収これを趣向に筆を採畢に初編の稿を脱せり そも勧学院の雀ハ蒙求をさへづりもん前の小僧ならはぬ経をよむのたとへも講釈師の家なり 畜生ながら猫とぶ講談を弁ぜし一ツのはなしを天理はしとて父に怪むと不思議にあれと子供衆がてんかく



第二回

其二
ふく



つゞき
あろせ
ぶぞの
きうれ
あぶて
こあが
ぶてくふ
ゆらも
らの三重
ふく三やご
くくく

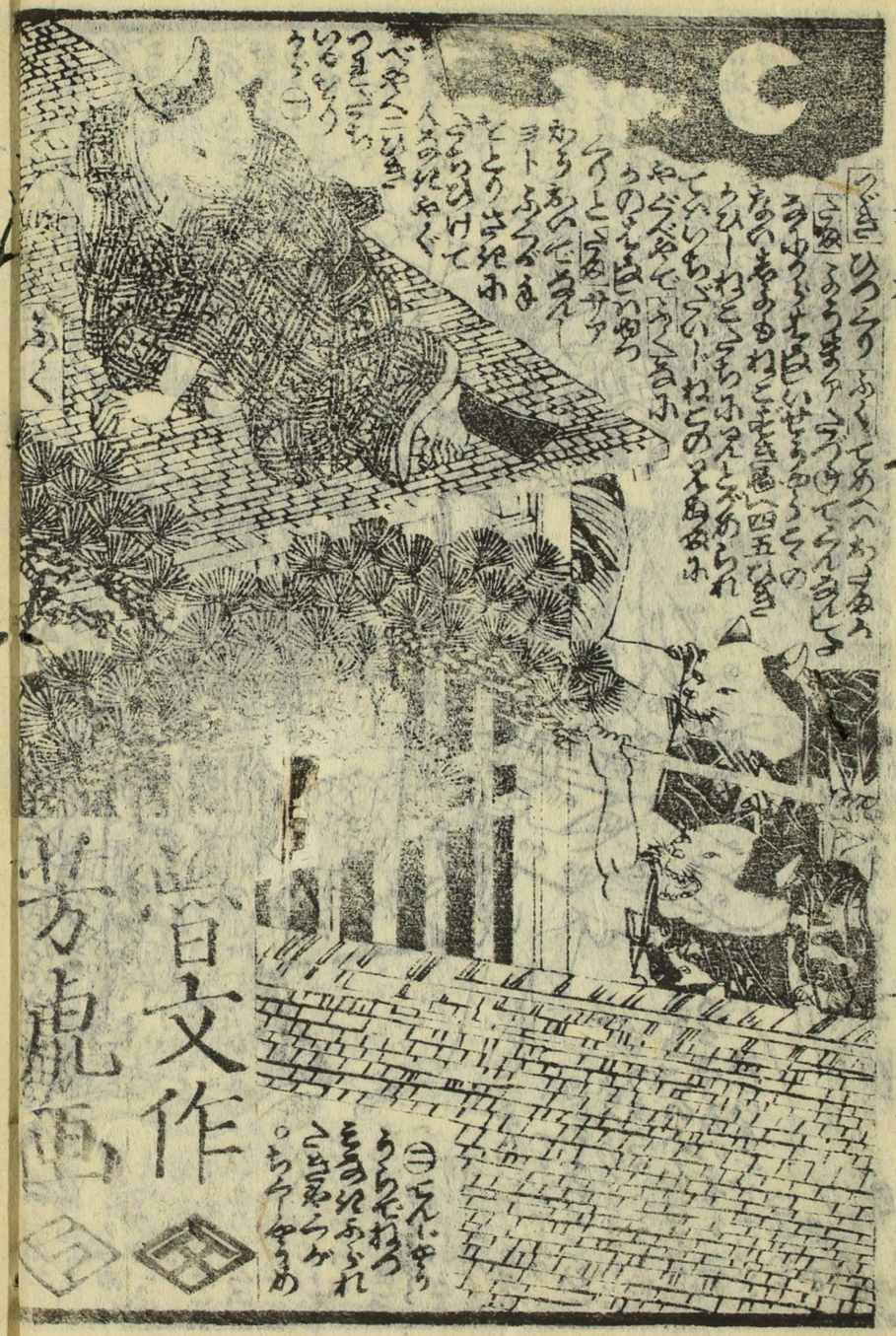
等三回

京きちの
わとかよひ
そうあげや
きちと
ゆせ五元の
普子えげめ
ぎんあとめ
ちらあ三う
らやかく
上ぎりて

ふく

(四) ぞんあんのたぐふいぐろせ
きぐくふいるゆもこもにれ
のにをけとこをふうわ六
おいきるくへあが身い
ありりむ色の六び色に
てふをけりりのぐろの
よるあいびのろい
ゆもそそん
ときゆくの
くりしゆと
めていうす
ゆもとわろ
とめふころ
ぶくんのうく
ふれるりゆの
ちうそちうを
ふくきんと
こもれきる
ゆぐねと
きりうで
いる名どろい
ゆふきをと
みぐれ字
ぐい

みけ
ぞりそねと
(二)
つれ
ビの名
もうす
ぐもと
うあこ
ぞり
きるふ
ぞふ
きこ
うひ
ねこの
こをと
めその
ゆの
ざき
ふあた
きろの
町のこう
ちうゆも
(三)
(四) つの七「反モルふく
さんうトいそまで」「民人」
うてふれこ
のうれの
うすぐ百八
ぐらにみ
ゆたうる
るをふぐ
ひとうもの
うらうる
りのもりく
をうしもらく
うのあたゆい
人ゆとまう
ゆれとあと
ゆくいそうと
うもいでこまう
のあゆのう
ビのもゆいこビ
さうりるまゆれこ
のふうぐらうるの
ゆきぐふゆわゆぐろう
ゆうさうるのもち会ぶ
ビらまでピナやく
うゆふら
ビさ
とび
(四)



松林堂

聖徳太子御一代記	全一冊
親鸞聖人御一代記	全一冊
同廿四輩圖會	全一冊
傳教大師御一代記	全一冊
一休和尚御一代記	全一冊
圓光大師御一代記	全一冊
日蓮上人御一代記	全一冊
西行法師一代噺	全一冊
弘法大師御一代記	全一冊

かゝる恒勇文化
喜為芳帝画
下

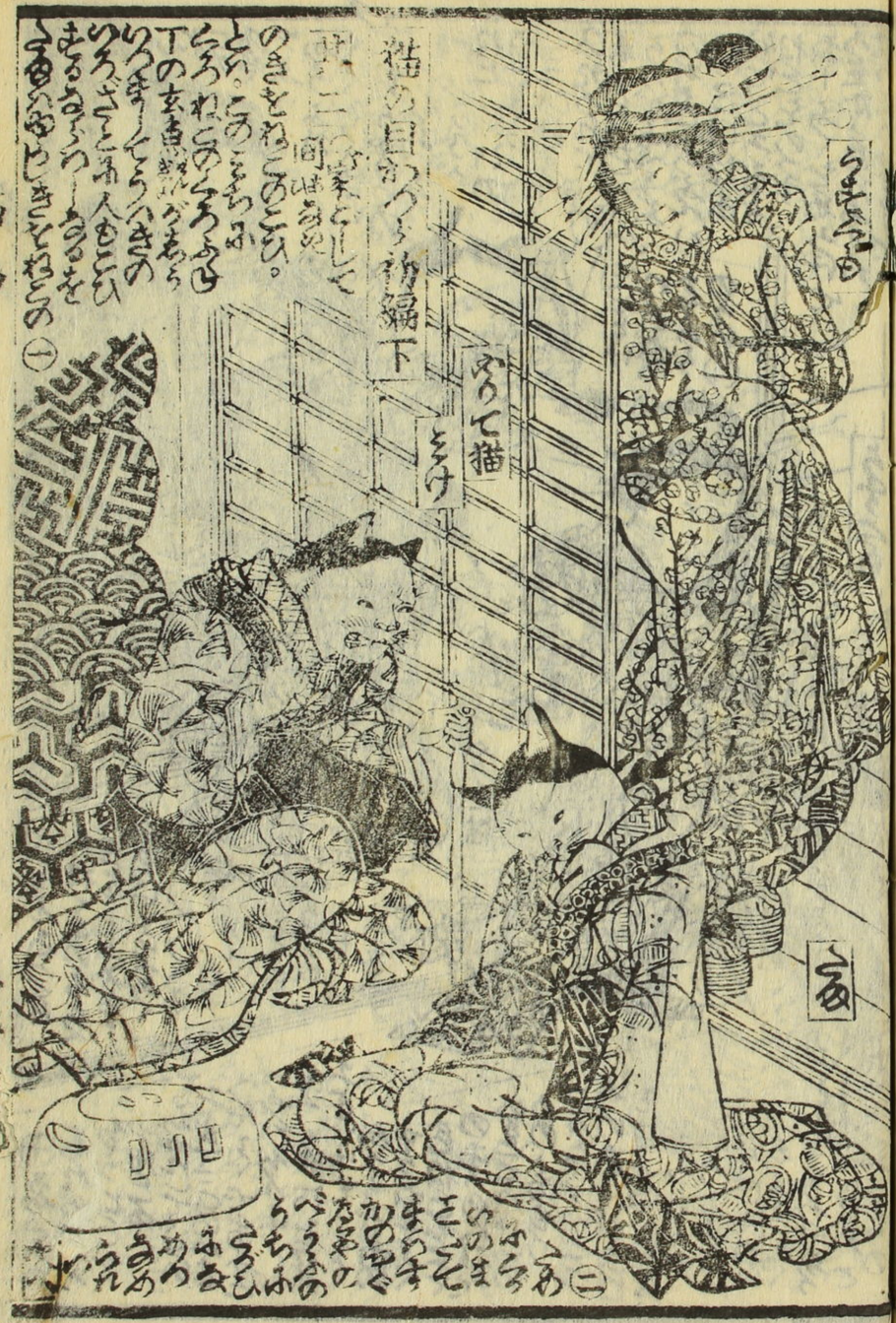
鑛花猫目鬘

初編之下

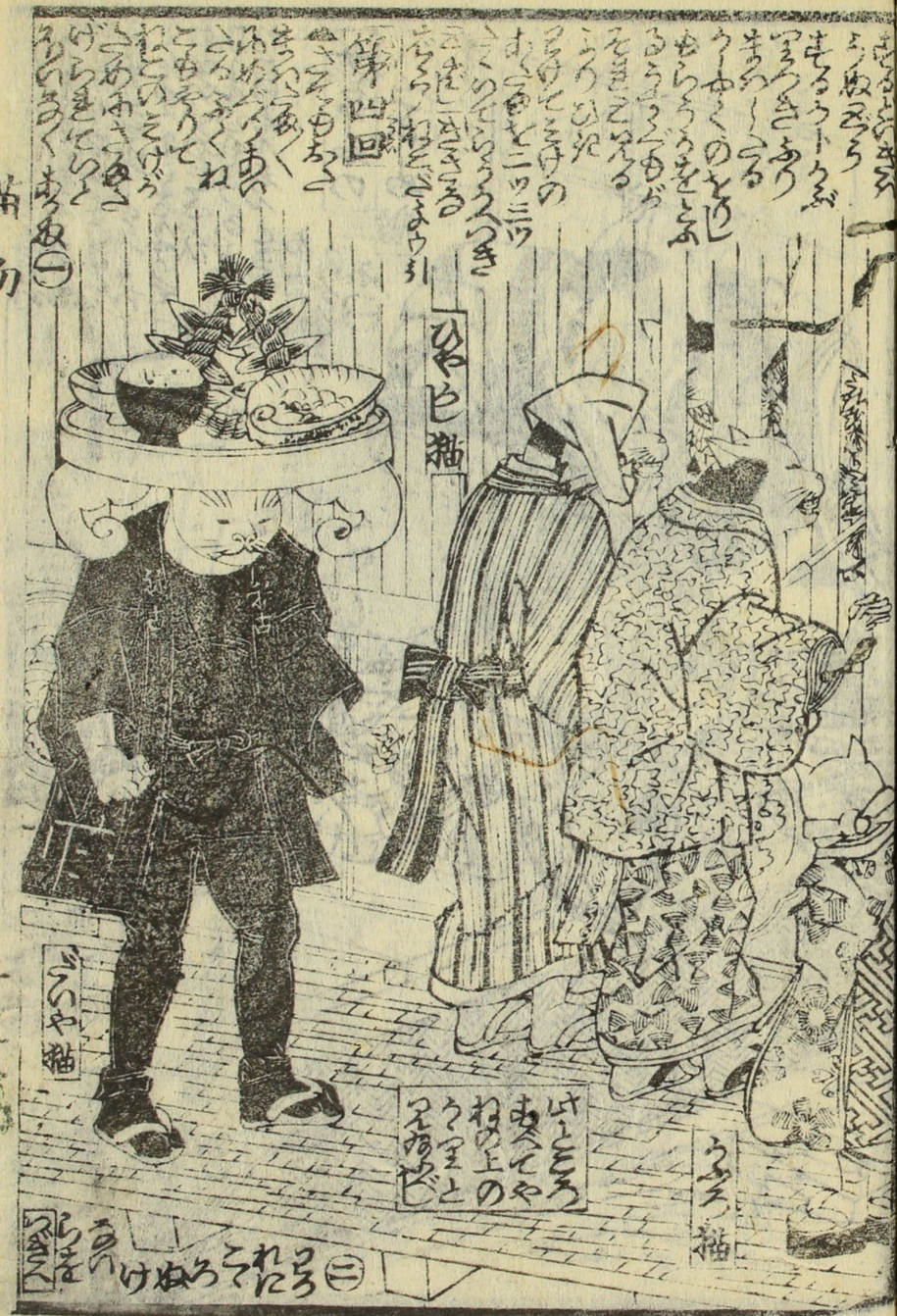
かぶとの文作

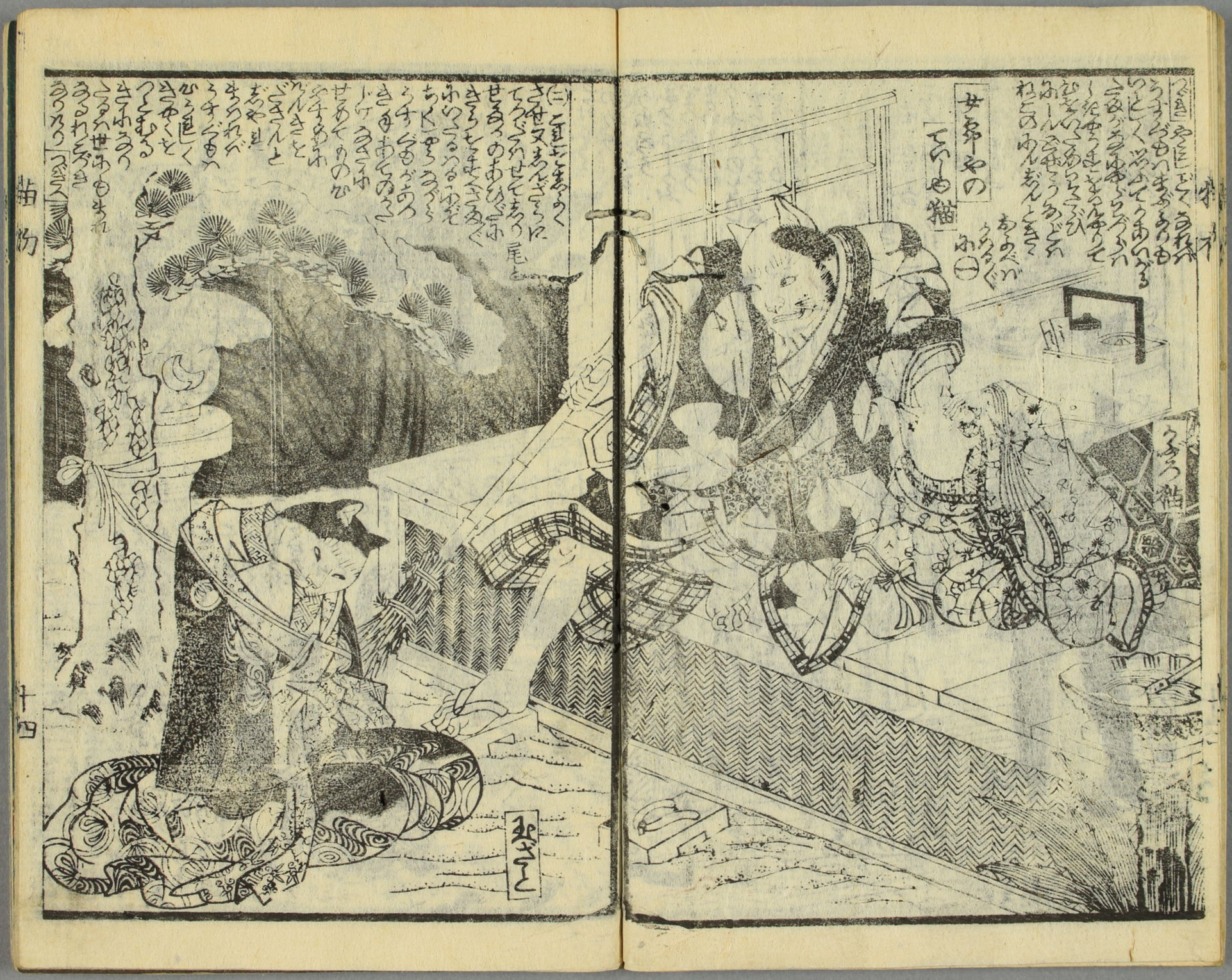
一壽亭芳虎画

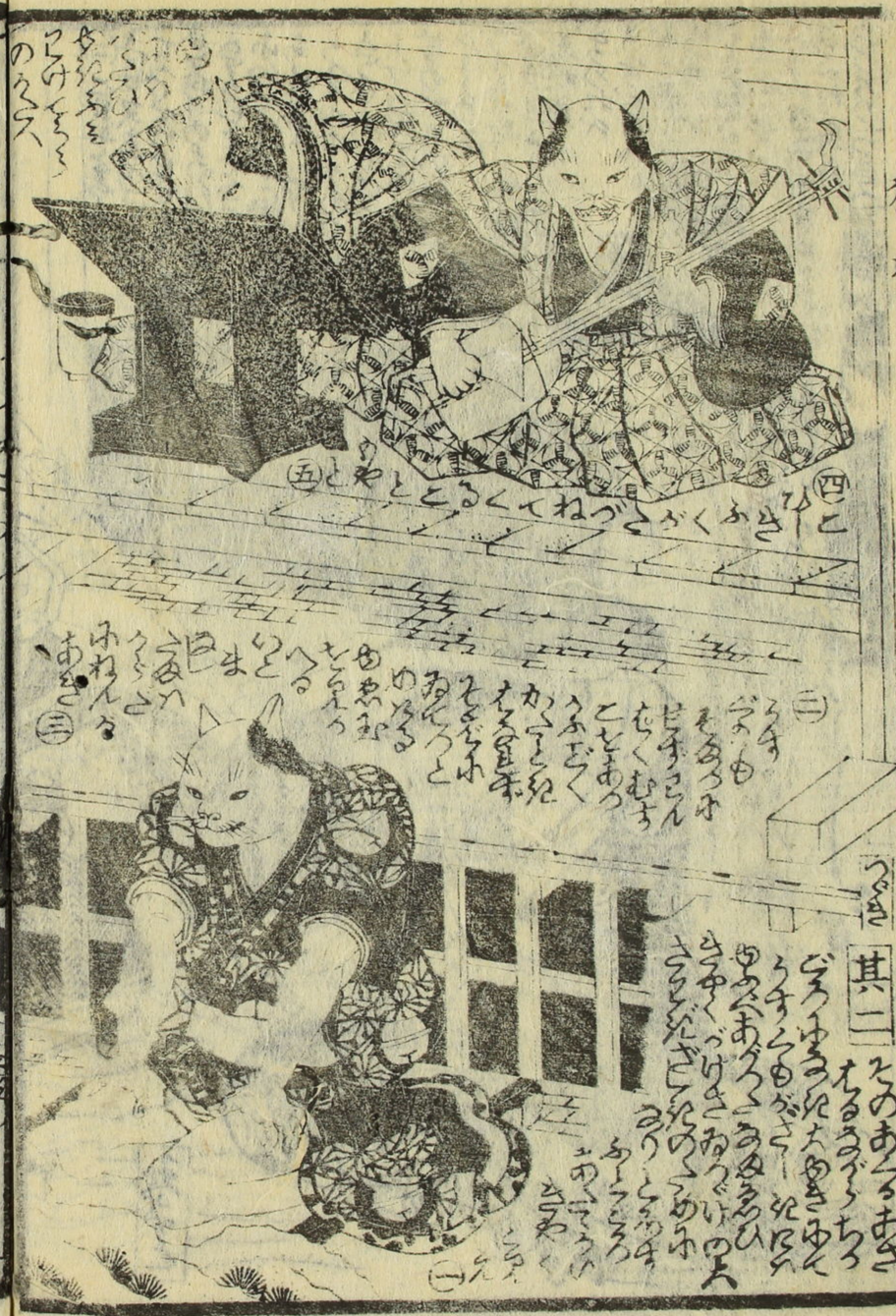
松林堂梓

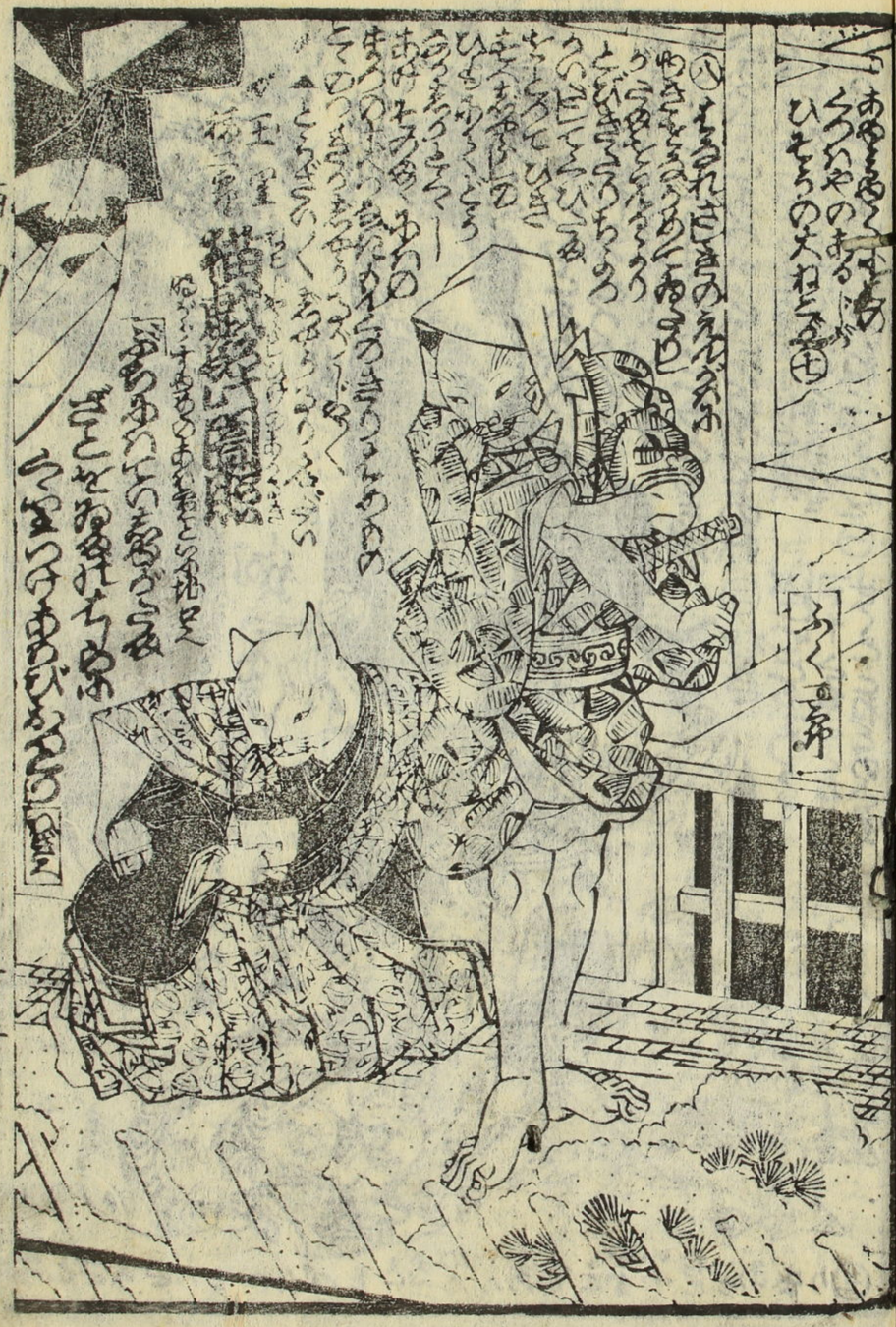


ごろう猫
大じん猫
あんま猫
うふろ猫
えんくねこ


ひる寝猫
第四回
うふろ猫
ごいや猫


女郎やの
てらした猫
うすゆき
袖
(二)
ぜんきと
ごきんと
おやま
きりれば
うすゆきの
ひろ色く
きゆくと
つもるる
さてはこの
うるわしせかも
あるれとぞき
あうろう
つぎへ
袖物
十四





家里
ふろ

家
ふく
ふろ

すぐ

ぞうら

ぞうら

山東の朧月を河竹の流れ摸

鎖花猫眼髪

初編 假名垣魯文作
追々出板 芳虎画

故人京山翁の猫の双紙。普く時好に叶ひ。星霜疾くも十歳を閲ぬ。千ト流行に送きうく板刻先年焼失して製本あること稀なる人常に遺憾に思ふものゝ。今般あらぬ愚案を設け。原本のうち花街と戯場の世界を御色加へるふ。めりやす。當時のこゝろを穿て。重様の目先を替々手續ひらんふへ奉ひ。三編い蔵雲の富の猫。玉の情猫の福と共に勉貫の手絡を拵へ様の下の俺作居半房尻の檀ヶ浦。世話場のこゝろをくみ。三編の時代ゆうり。芝居がゝの面組ふ猫の怪談。ゑゞ口で第四編へ行く。面白ものゝ続出いたしたるこゝ。ゆれて試たまへ。

地本草紙問屋 松林堂 藤岡屋梓
江戸通油町

二編上

黄金花猫の図かづら

上の巻

石天作

より幾畫

一交斎 梅素画

松林文庫

柳猫の盤觴ハ。高麗唐土といひつゞけバ。猫の皮ゆゑ彈唄ふ。
大盡舞の小唄めつ〳〵く。猫ぢや袮とぢやの古車
來歴ハ山東翁ゞ大槩尺くせバ。猫の尾尾ゝ
僕輩ゞ。又ゆゑさゝに何をの云ん唯
古猫の足跡をふみの取次手畜ゝ
猫ゝ話説を種よこの紀ち〳〵ゝ柱の爪乃
拾遺談猫の目假面時々ゝ。變る浮世の
流行を穿鑿といへるゝと鳴呼ゝ。已ゝの勝手ゝのゝ歩行ふ。
流下のゝゝを捜し。塵塚の奥を探て次編の腹稿を満ゝゝむ

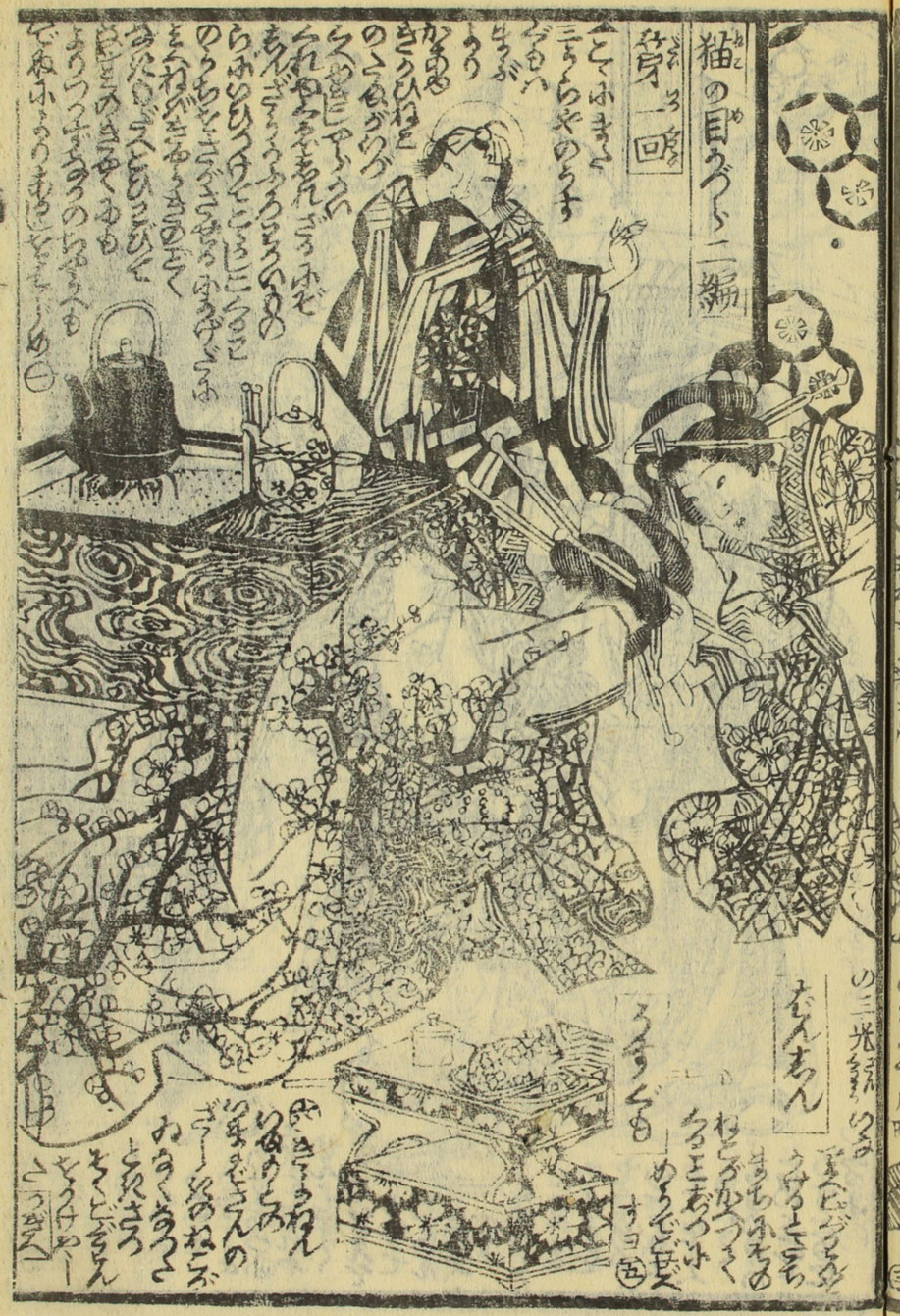
文久三亥春叢兒

假名垣魯文記

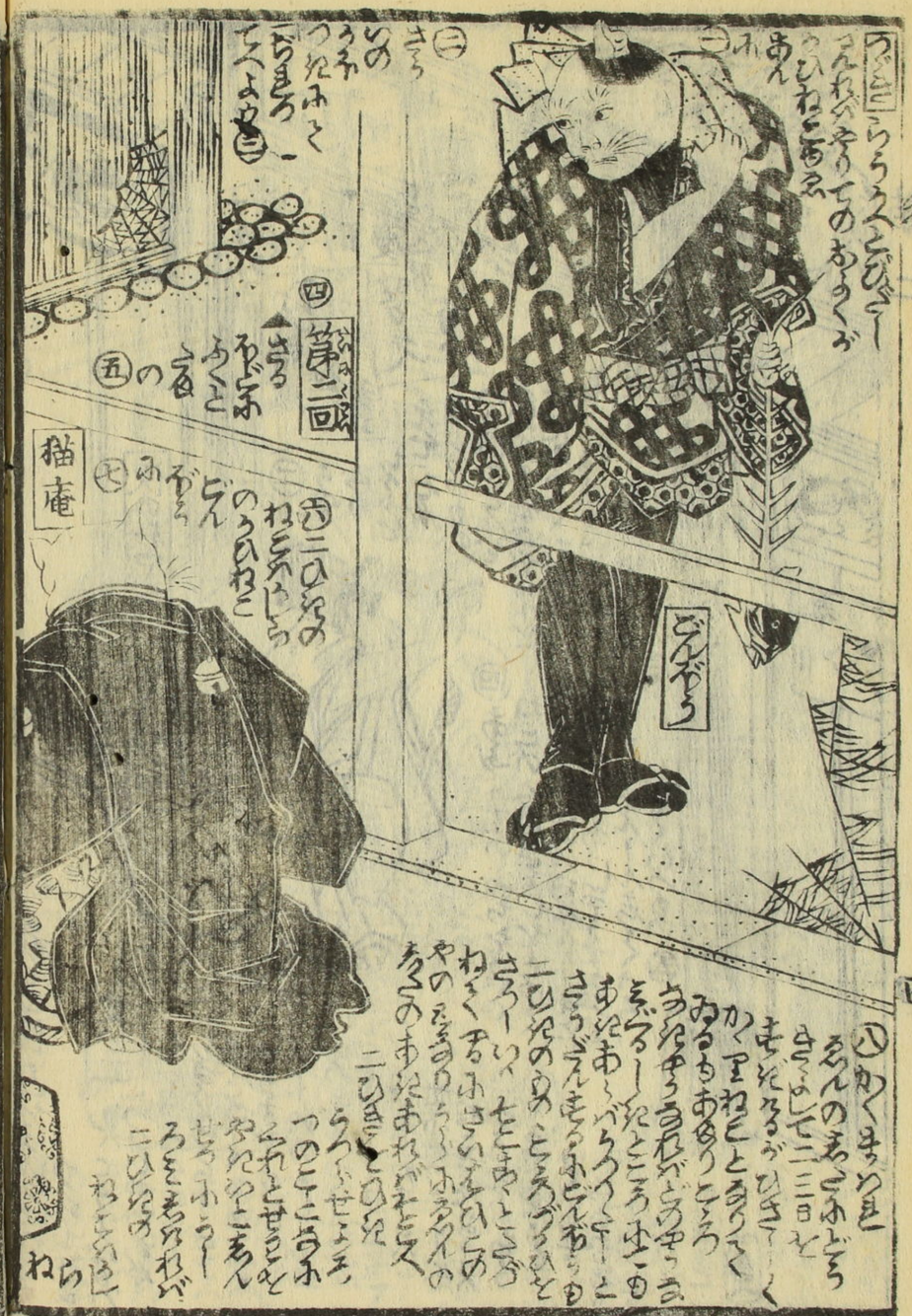
水揚帳
町家の娘

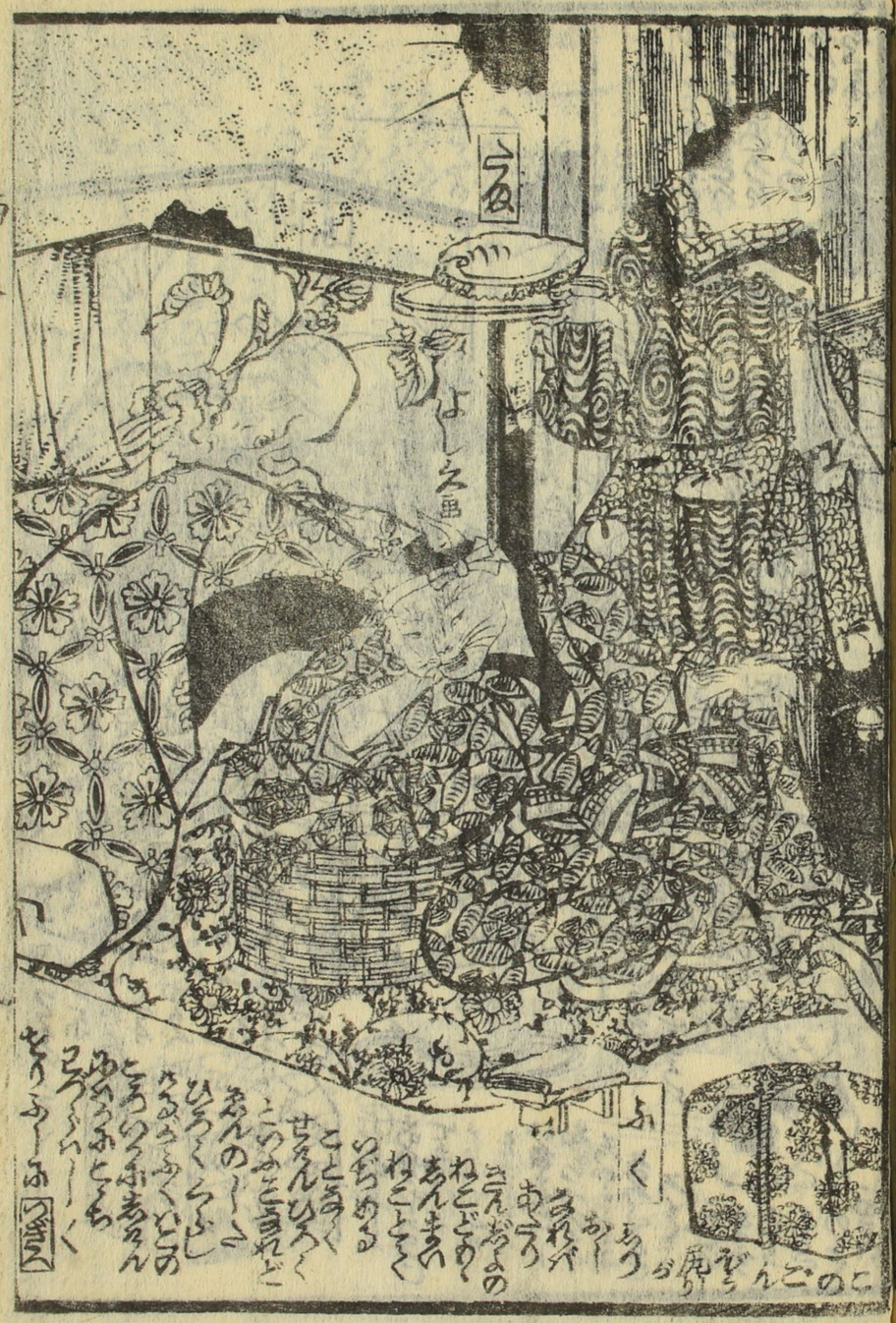
萬覺帳
金銀入帳
宝井琴凌
猫の恋
商家の子雅

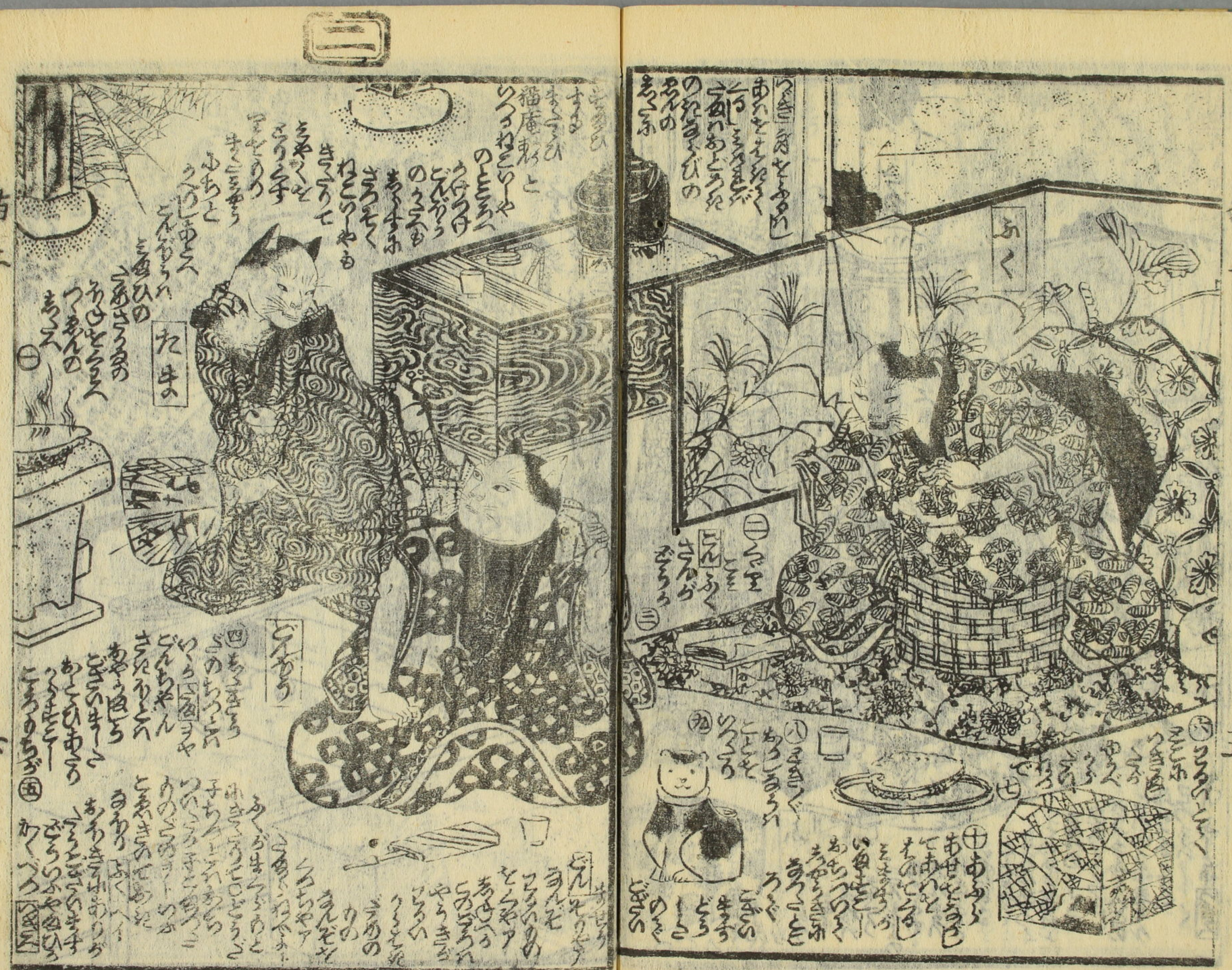
使のおやぢ

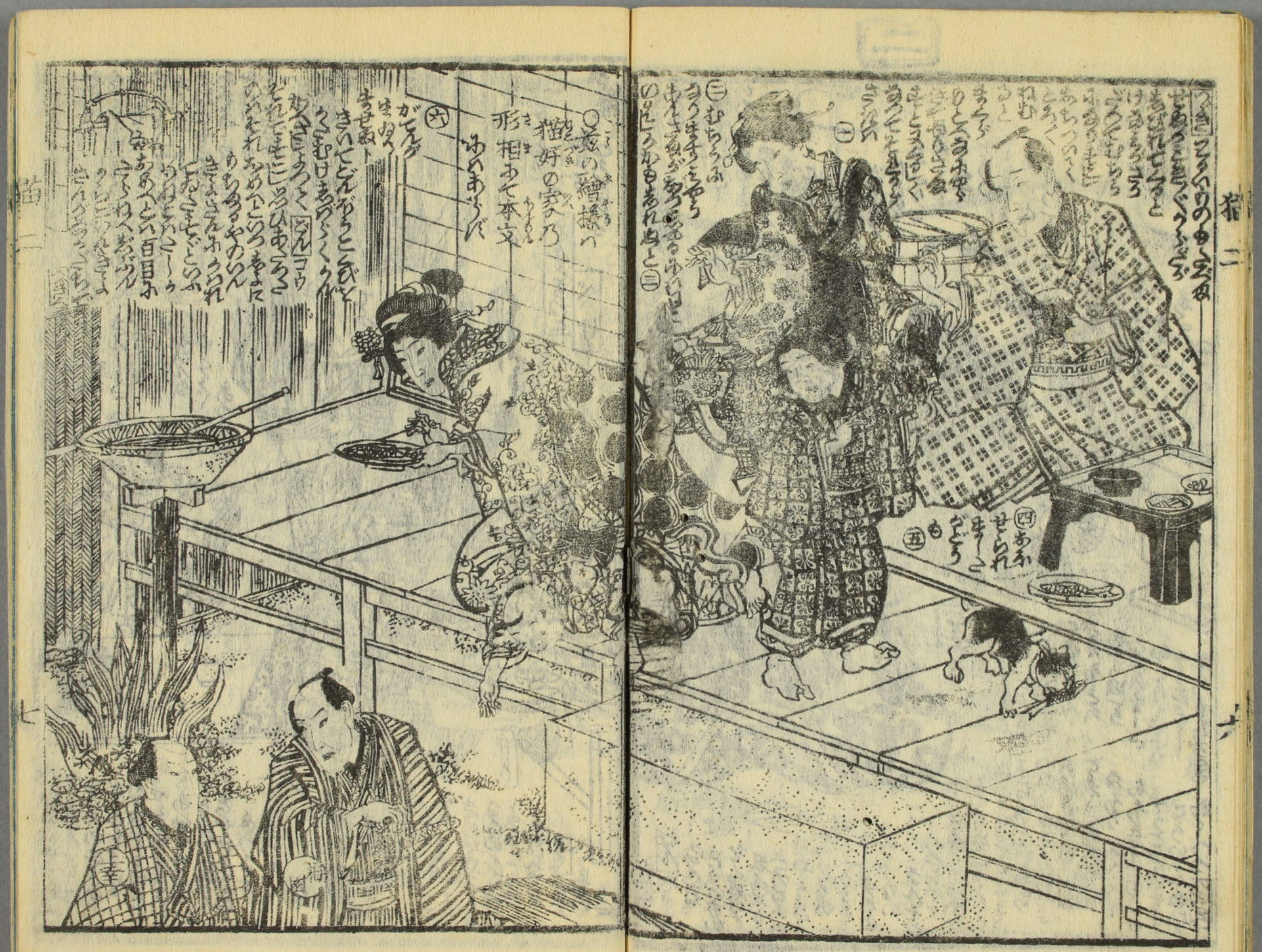

猫の目うづら二編
第一回
たん吉

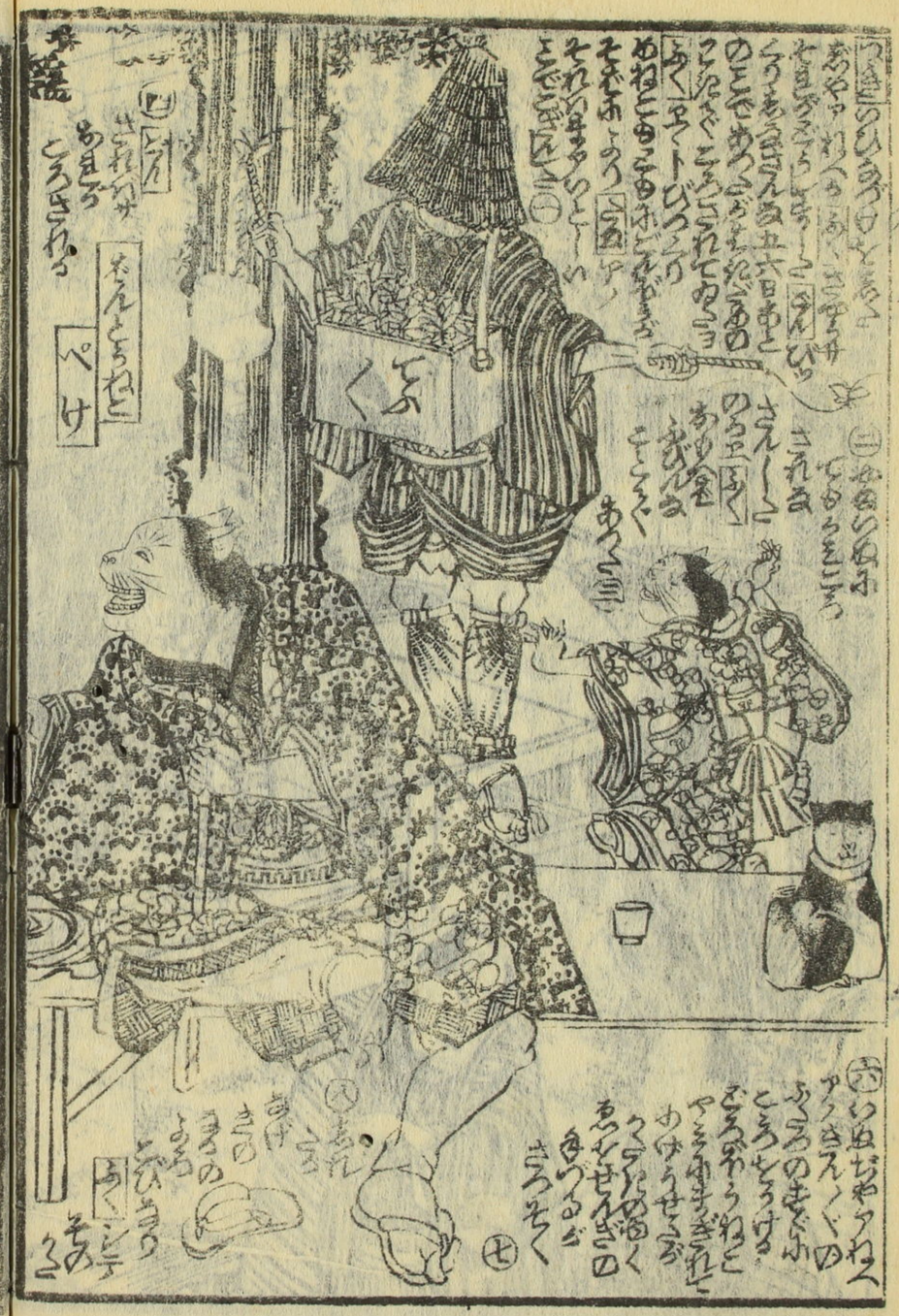
使のおやぢ
其二
大福帳
奉
貞
正位
元稲荷
納
千九かつ
らく
旅
狂
歩
度
久
貞
龍
吉
大福帳


第二回
猫庵
どんぐり


ふく

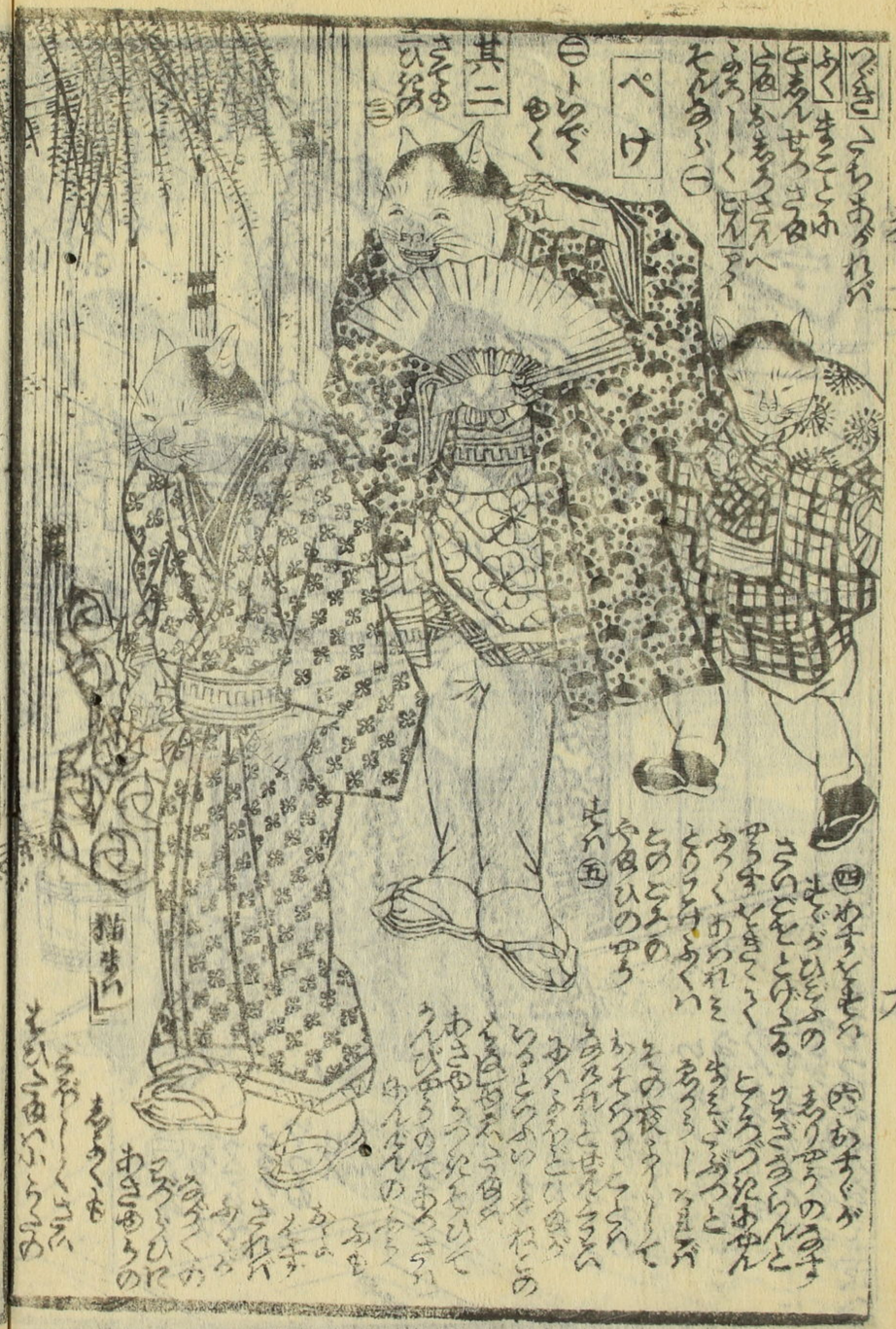

ふく
たぬき
どんちゃん


猫好の家乃
形相あて本文
ゆいあらべ


ぺけ

浅草
火ちがい
開新天誌
本問屋
開新天誌
本問屋

扇面亭



つぎ こちあがれば
ふく まことふ
ちゃん せろさる
白 ふもろさへ
ふろしく ぢ
そんあふ 一

ぺけ

二 トいそぐ
ゆく

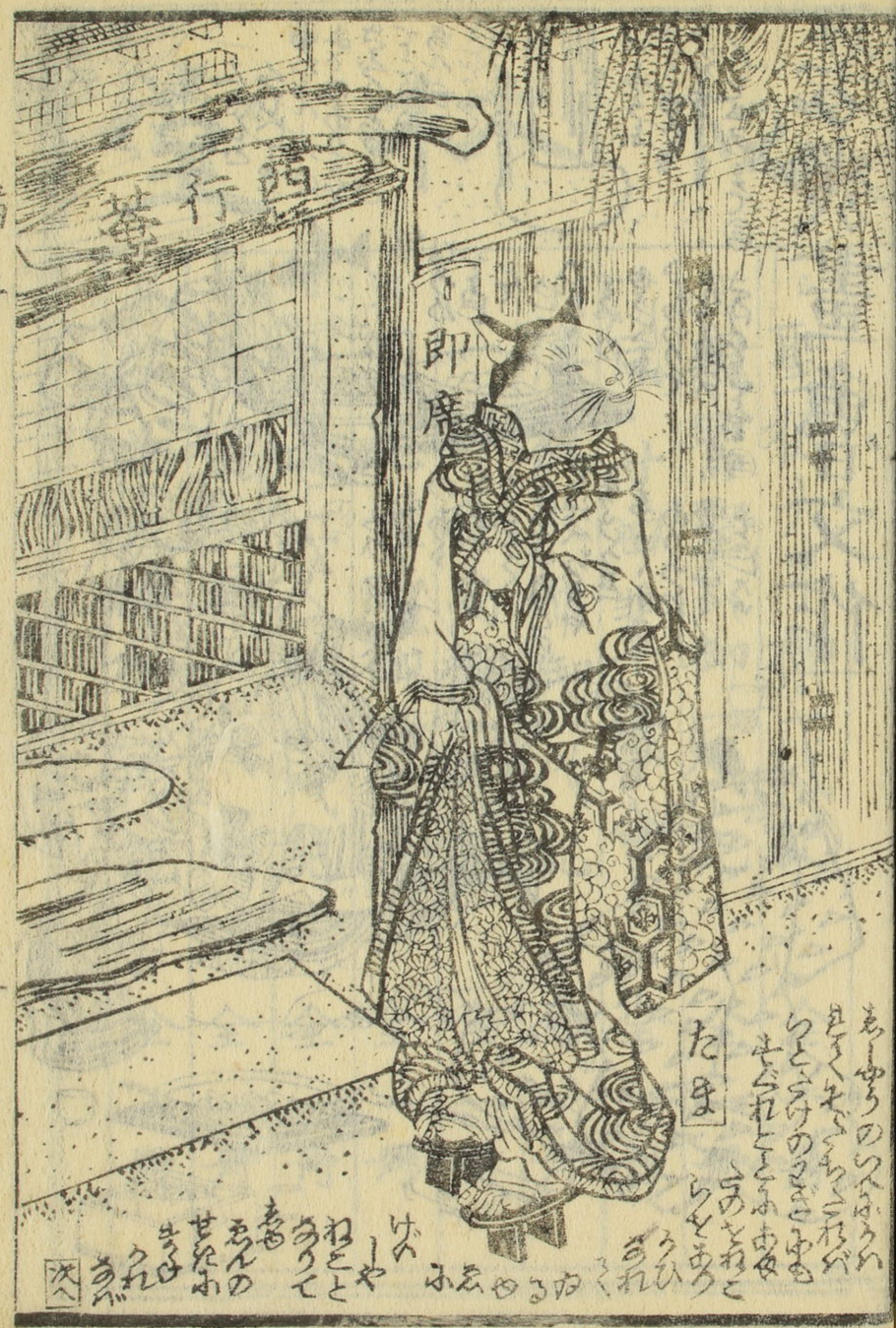
其二

さてその
ぢ八

四 ゆすをもち
ぢぐひとふの
さのことをとりくる
ゆうすときくく
ふくあられを
ちうちみふくい
このとその
ぢ四ひのゆう
ぢ八 五

六 あすぐが
ありゆうのうすう
つぎうらんと
ところづれあん
ちぐうしくすと
ちうしくすぐが
その夜うしくて
かそろうくてこの
うされとせんうこん
ゆいうわとひゆが
いうとうふいしれねこの
ちとゆふうゆ
あさゆうつれそひて
うんひゆうのてあうこれ
ゆんんんのうく
ふも
あよ
くすい
これば
ふくく
ゆうくの
ちうくひに
あさゆうの
ちうくも
ちうしくこん
ちゆうしくふいうこの

猫三



たま

ちゆうのいふふうい
ちくくそちくこれば
いとこみのうさこも
ちぐれとこふゆあ
このそれこ
いうとあう
ふくれ
ゆるゆふ
ふふ
ゆの
しゃ
ねとと
ありて
ちゆん
ちんの
ちゆふ
ちゆ
ふれ
ぢば

次へ

芳幾畫魯文作

松林堂

- 聖德太子御一代記　全一冊
- 親鸞聖人御一代記　全一冊
- 同廿四輩圖會　全一冊
- 傳教大師御一代記　全一冊
- 一休和尚御一代記　全一冊
- 圓光大師御一代記　全一冊
- 日蓮上人御一代記　全一冊
- 西行法師一代噺　全一冊
- 弘法大師御一代記　全一冊

鑛花猫目髩

とくのさくねこのめかづら

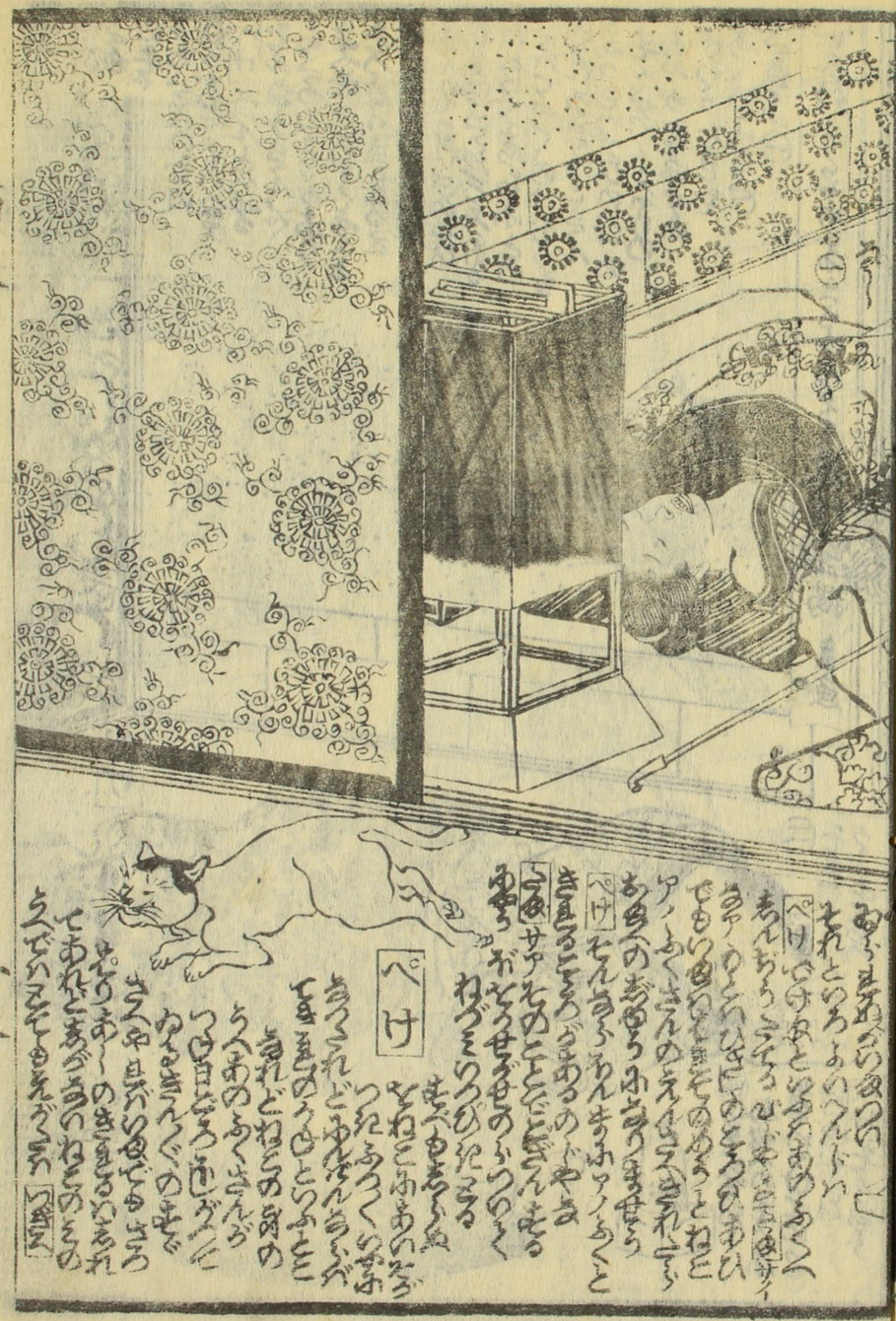
二編下

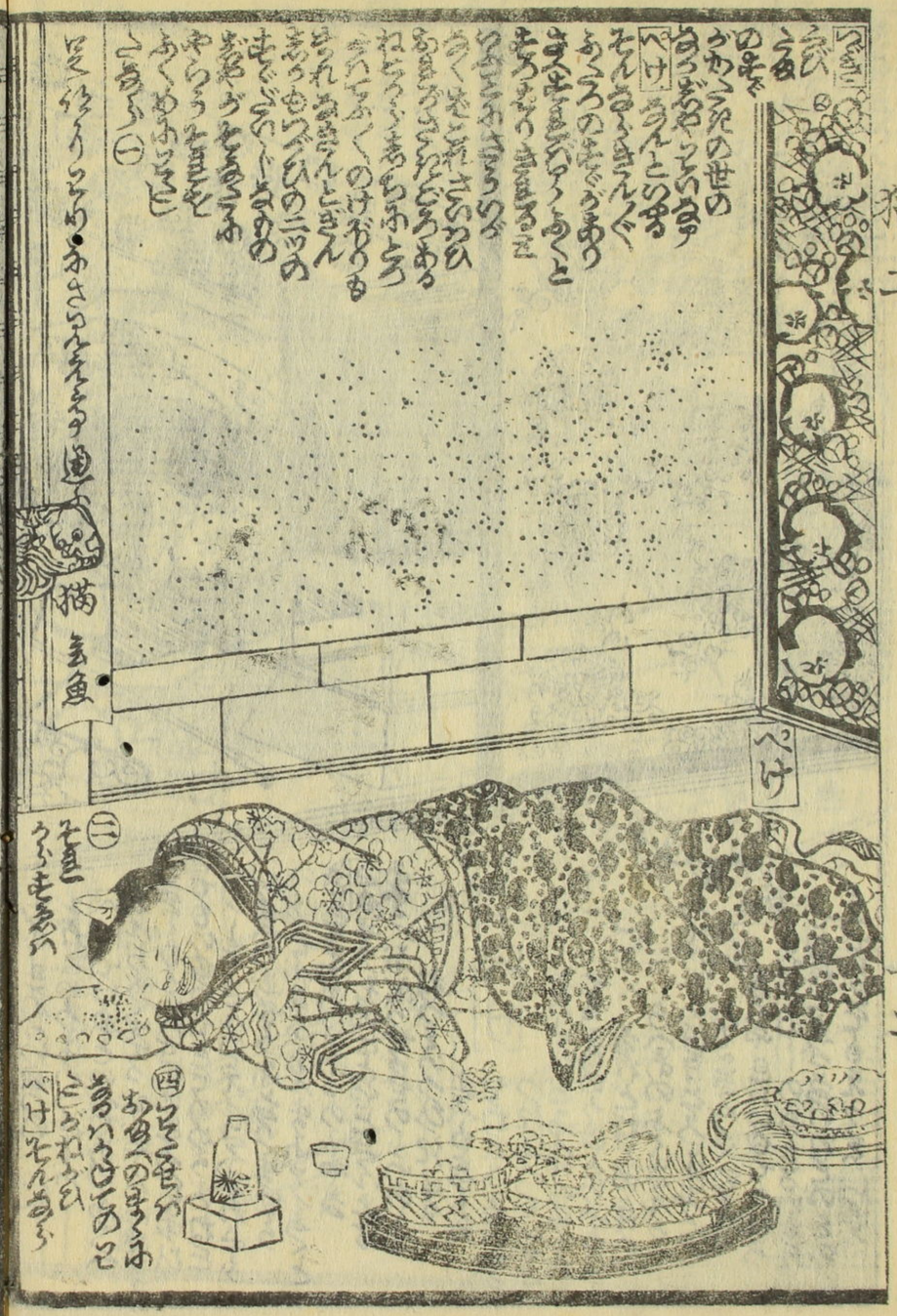
假名恒魯文作
一惠齋芳幾画

松林堂壽梓

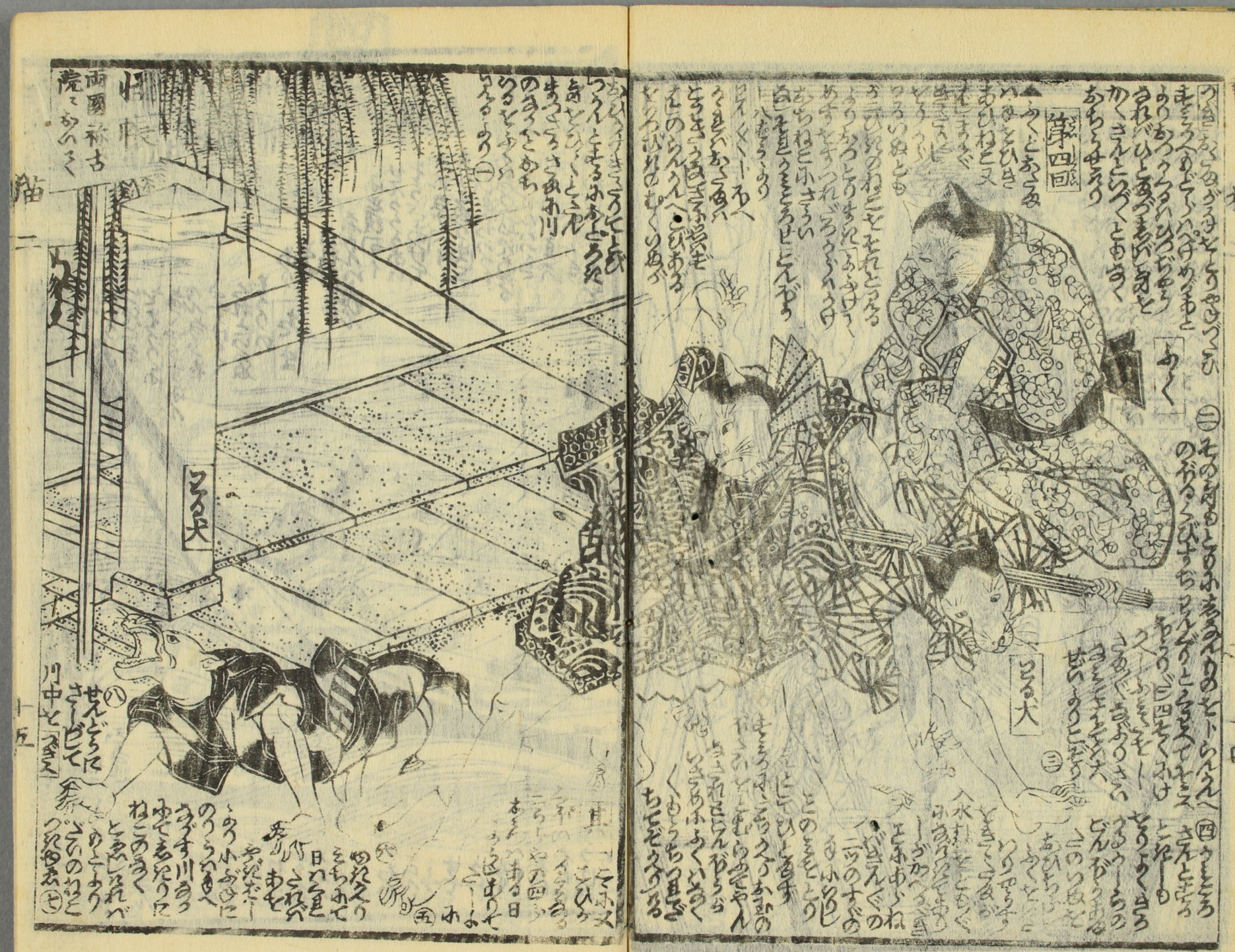
猫の目かぐら二編下
第三回
ぺけ
猫二
十一
三
一文銭
猫の目
二編
魯文作
ぐらやさん

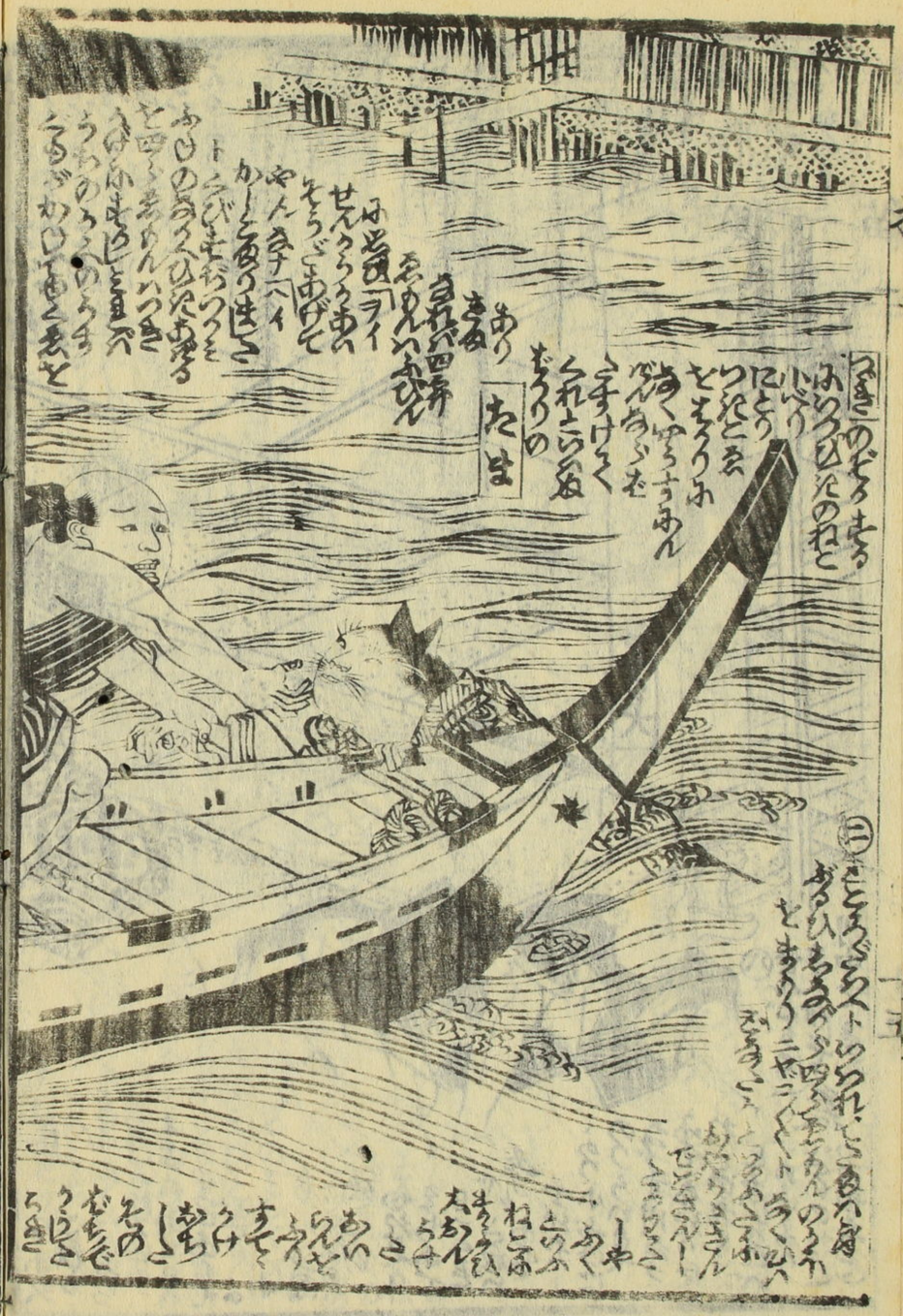
たま

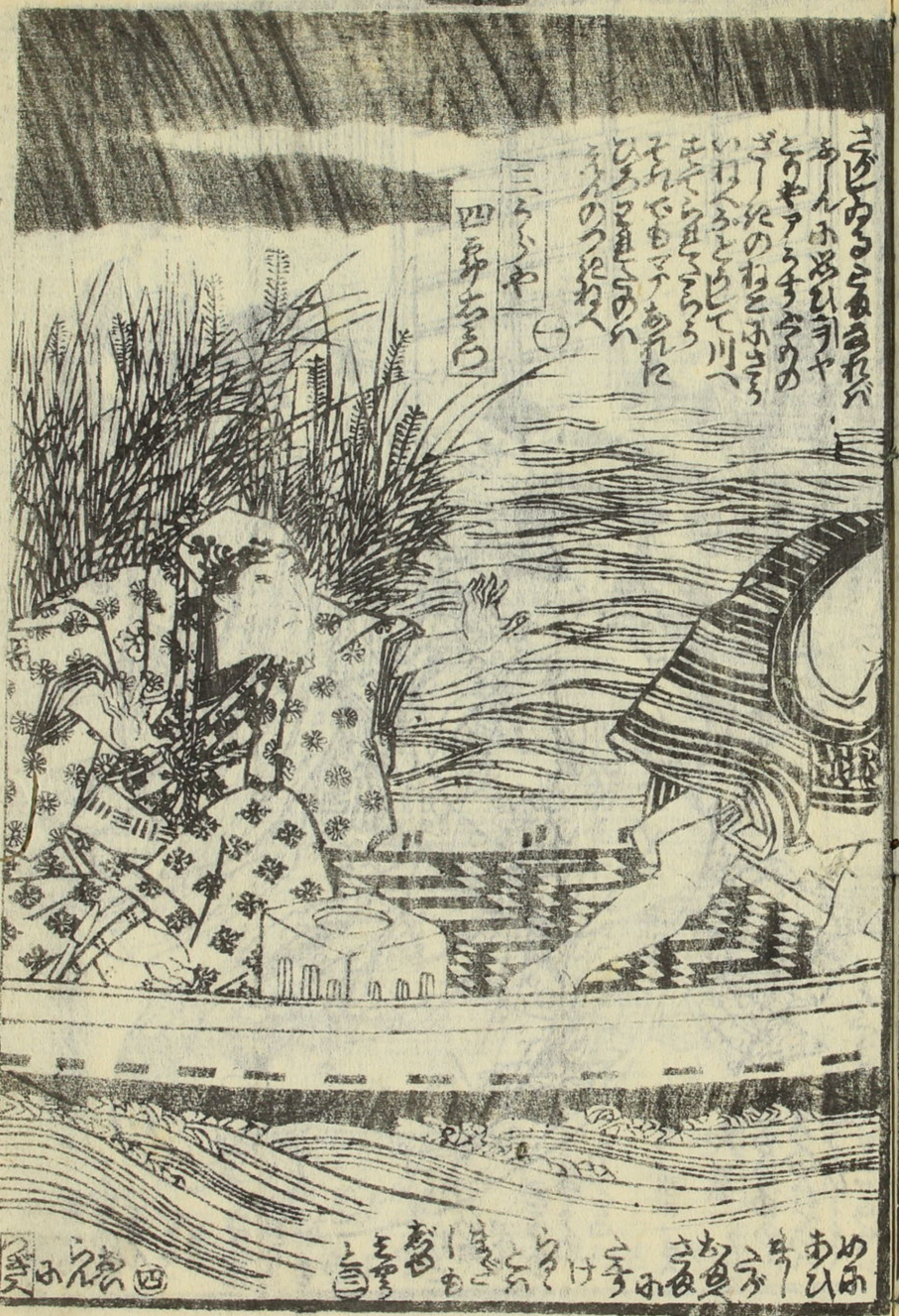

ぺけ

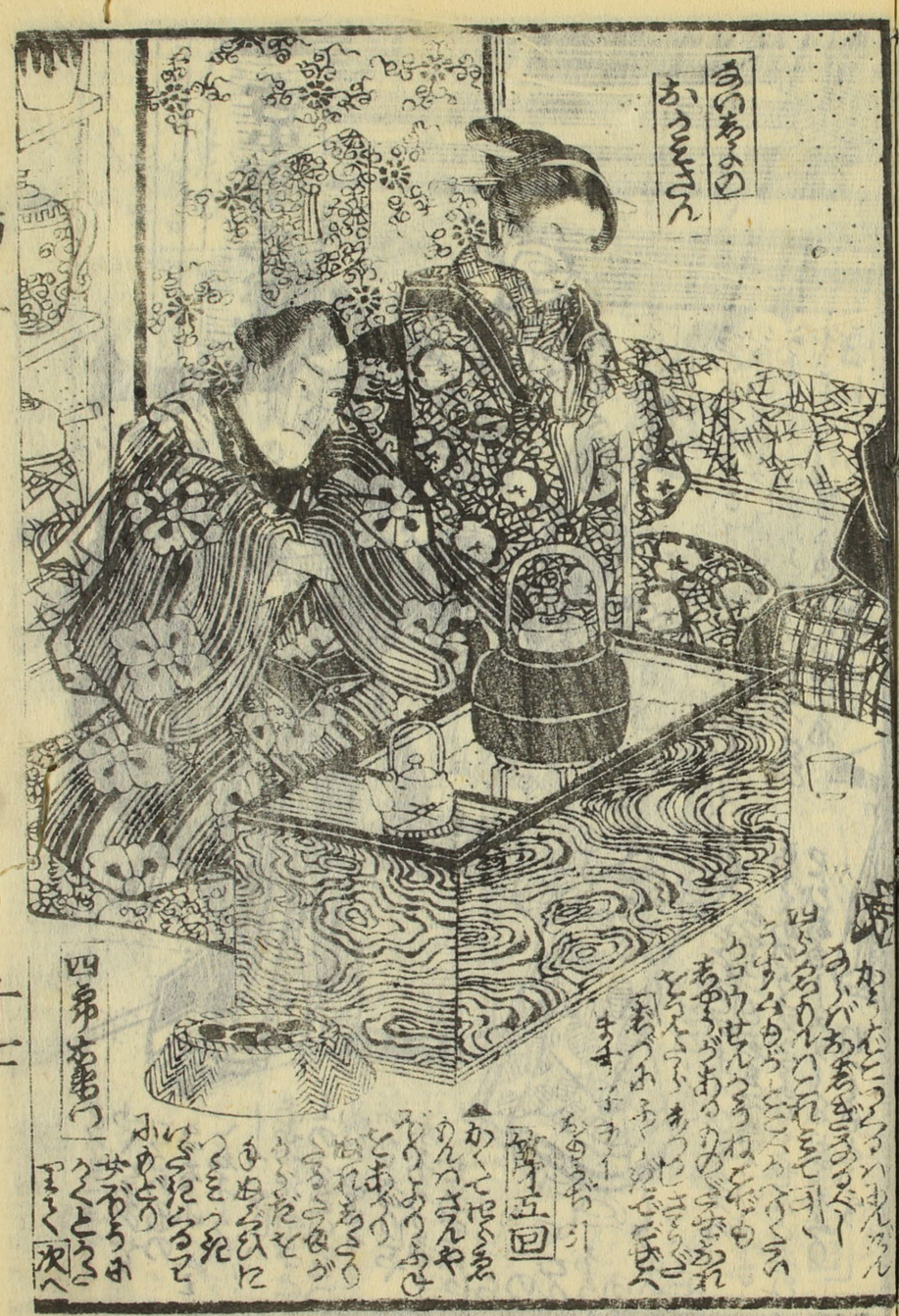

猫
魚
ぺけ
ぺけ

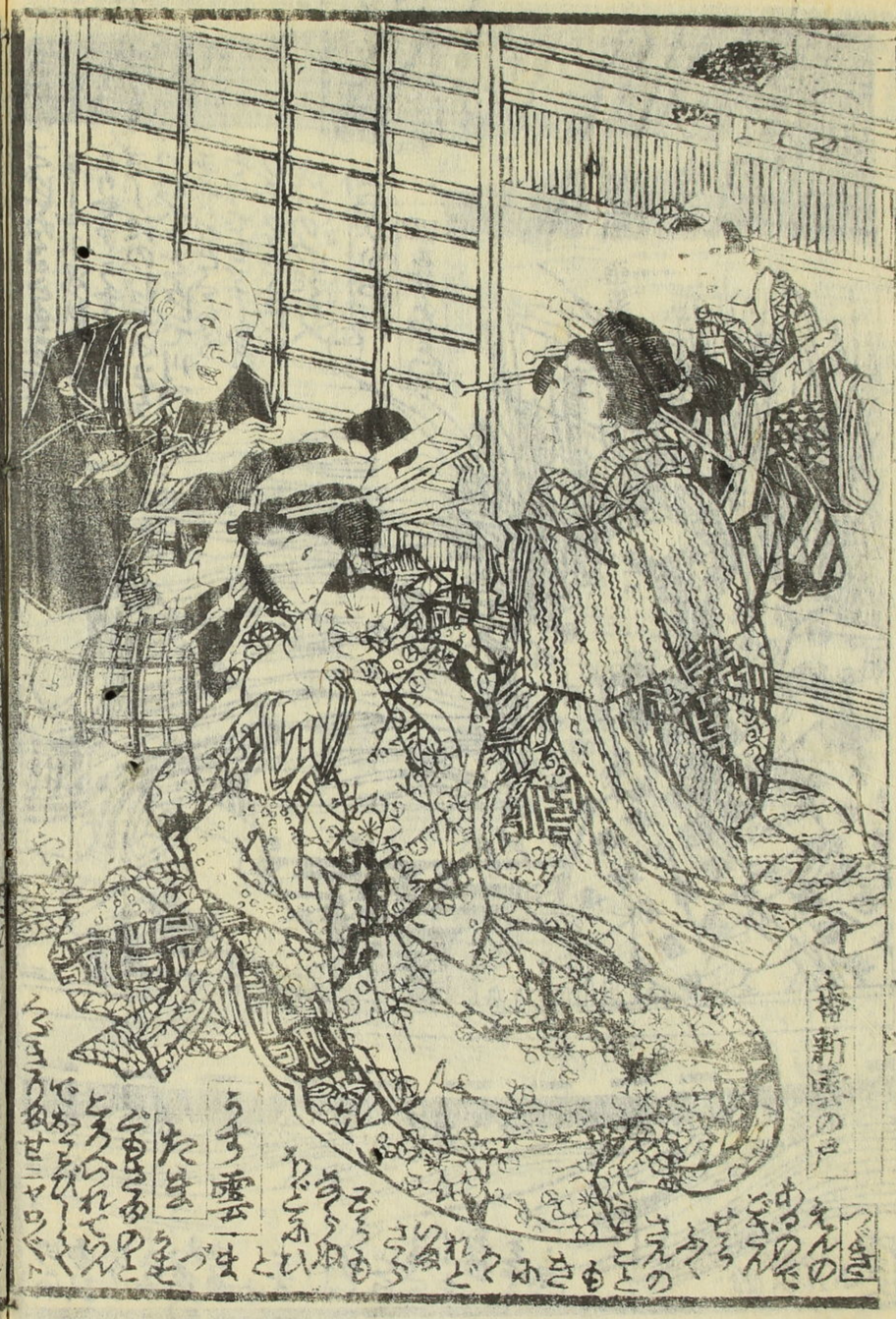
ふく
たま

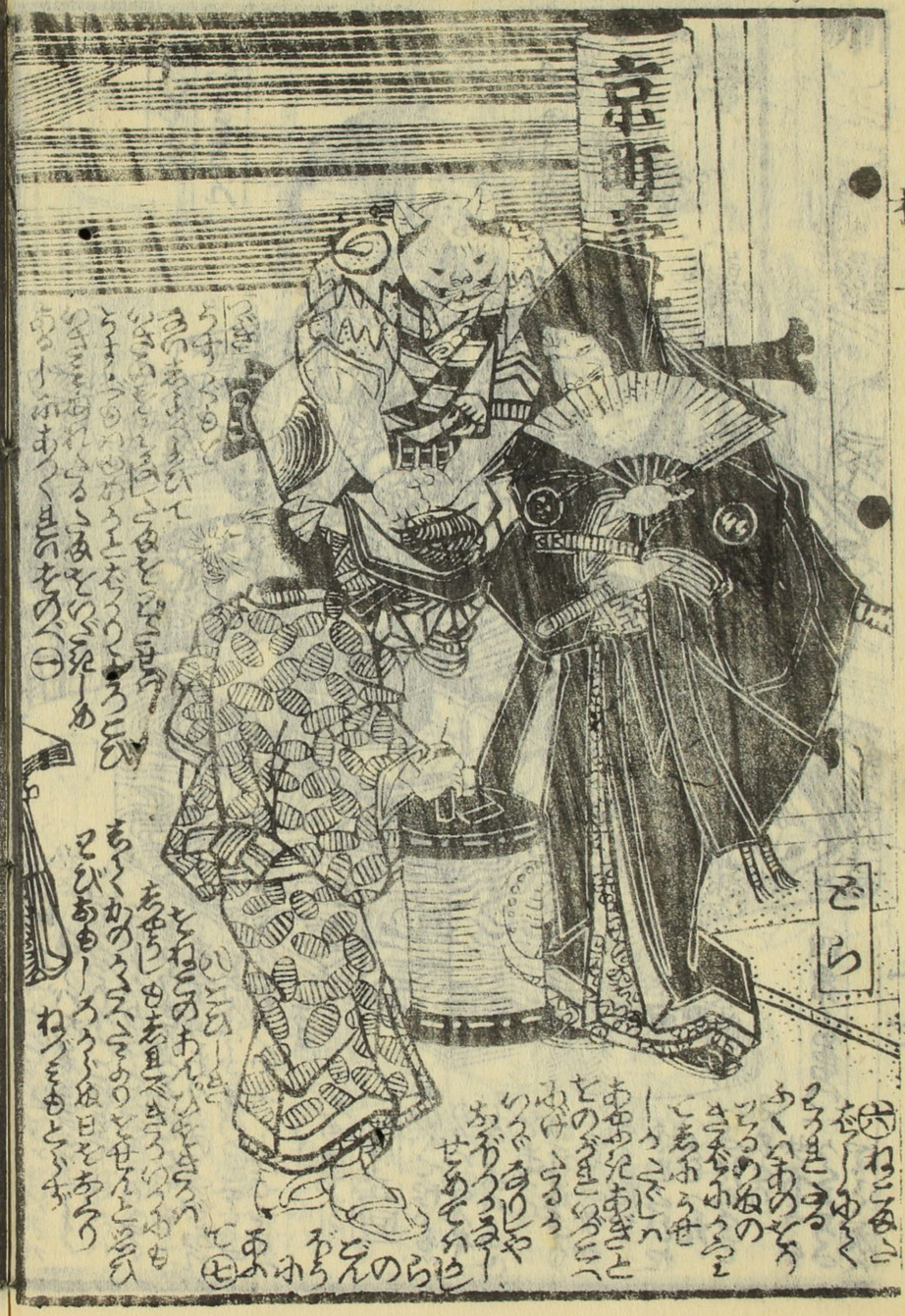

第四回
ゆく
とる犬
両國 秋古院こあのこく
とる犬





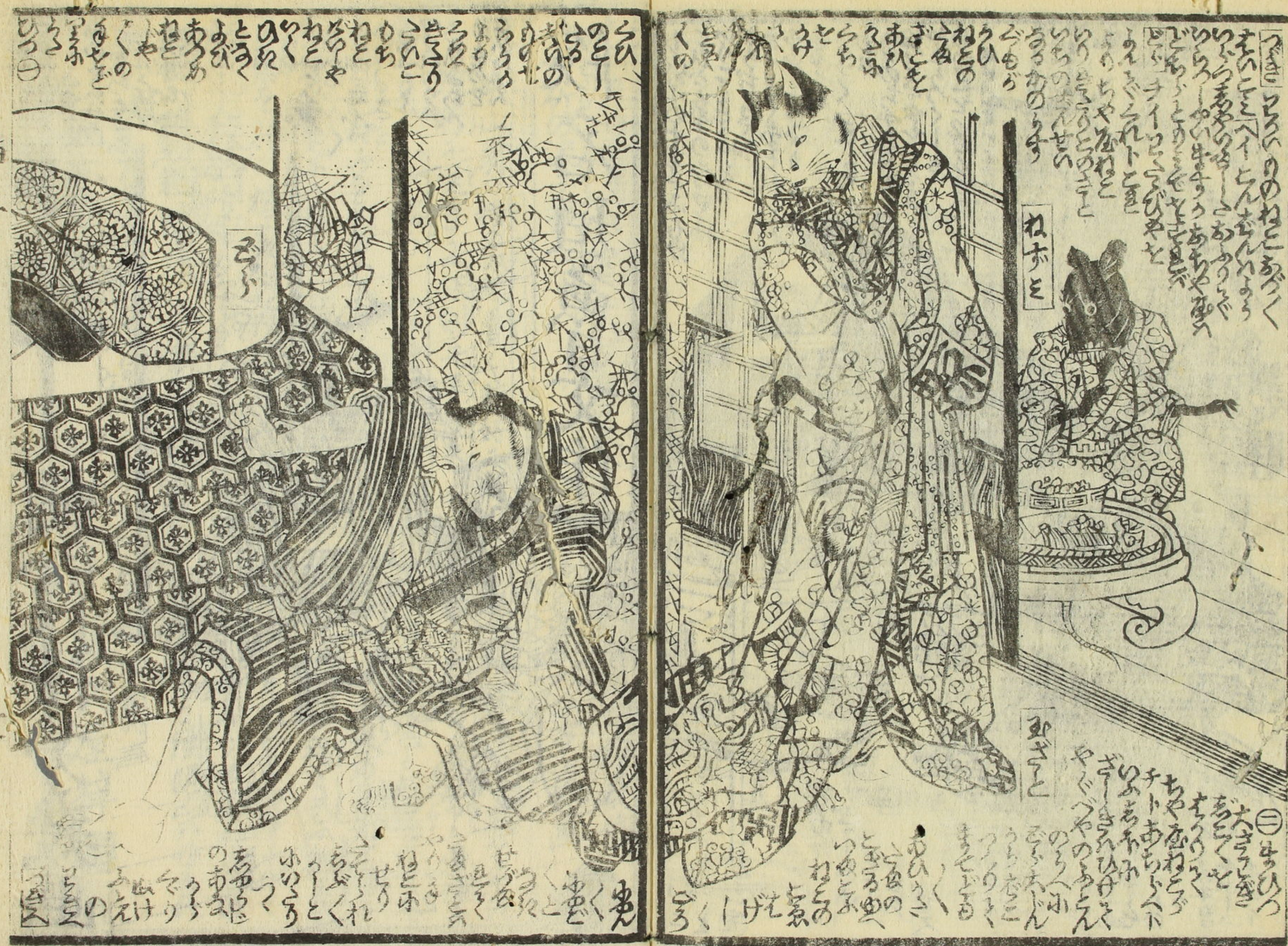

きのあるよめ
おうしさん
四郎左衛門

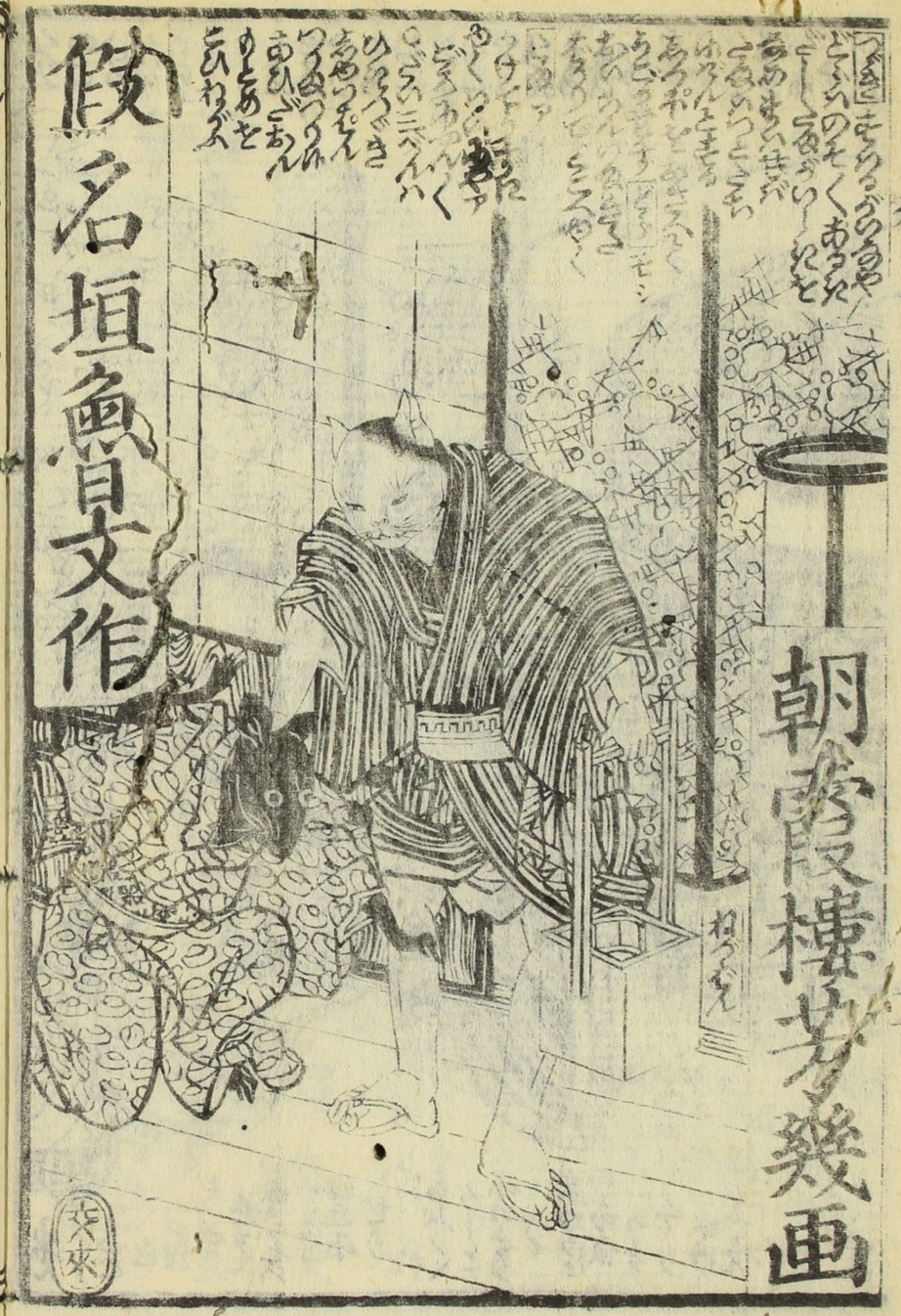

番新蔵の戸
うす雲
たま


京都土産
ぞら

とけ
第六回

三ヤンヤ〳〵


ねずと
むさと
ごろ



山東の朧月を河竹の流ふ摸

鑛花猫眼髪

初編

假名垣魯文作

良ゝ出板

芳虎画

故人京山翁の稽の双紙。普く時好ふ叶ひ星霜疾くも十歳を経て千ト流行ふ送きう〳〵板刻先年焼失して製本あると称ふ常と貴慎ふ思ふめり〳〵。今般あらゝふ愚案を設け。原本ふの花街と戯場の世界を脚色加へるふ。ゆゑ〳〵当時のようすを穿て。亜様の目先を替々弓續ひらんふ入奉ひ

三編

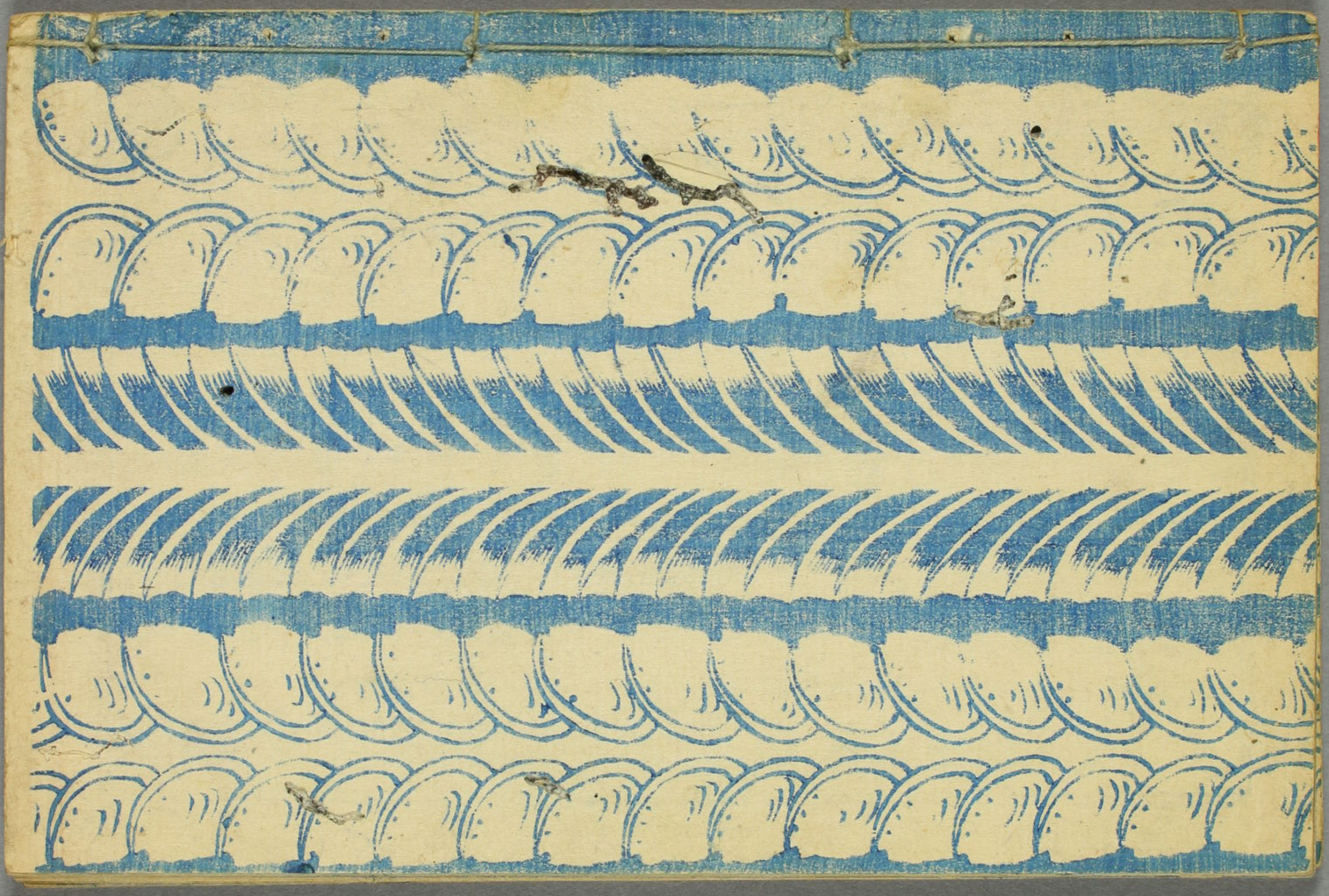
い為雲ゞ畜の猫。玉ゞ情猫の福と共ふ勉員の手鍋を提け楊のつの侘住居牛房尻の煙ゞ俠客あるまとふ〳〵〳〵〳〵世話場のこんくんをつく〳〵

三編

より時代ゆるり芝居がゝの亜組ふ猫の怪談ゞ。ロで第

四編

〳〵〳〵回數たつぷり續沢山ひらきんあれて試こたまつとけ〳〵〳〵んでヤ〳〵

地本草紙問屋　松林堂　藤岡屋梓

江戸通油町